

# スクールカウンセラーの効果的な活用に向けての調査研究

2003・3

## 宮城県教育研修センター教育相談班

### 研究協力者

宮城教育大学教育学部助教授 佐藤 静

### 所 員

門脇 啓一 今野理一郎 鈴木 則男 藤倉 真一  
佐藤 敏文 脇坂 晴久 佐藤 芳枝

### 専門研修員

前田 正（本吉町立小泉小学校）  
後藤 秀樹（小牛田町立不動堂中学校）

## - 目 次 -

研究の概要・キーワード	3
1 研究の趣旨	4
2 調査研究について	5
2.1 調査目的	
2.2 調査対象	
2.3 調査時期	
2.4 調査内容	
2.5 調査者	
3 スクールカウンセラー配置校を対象とした調査	6
3.1 目的	
3.2 方法	
3.3 結果	
3.3.1 回答者	
3.3.2 スクールカウンセラー配置校におけるスクールカウンセラー活用の実態調査	
3.3.3 スクールカウンセラー配置校の意識調査	
3.3.4 スクールカウンセラー配置校の成功事例及び要望・意見等	
3.4 考察	
3.4.1 回答者について	
3.4.2 スクールカウンセラー配置校におけるスクールカウンセラー活用の実態について	
3.4.3 スクールカウンセラー配置校の意識について	
3.4.4 スクールカウンセラー配置校の成功事例及び要望・意見等について	
4 スクールカウンセラーを対象とした調査	29
4.1 目的	
4.2 方法	
4.3 結果	
4.3.1 スクールカウンセラーの基礎的特性調査	
4.3.2 スクールカウンセラーの意識調査	
4.3.3 スクールカウンセラーの要望と提言	
4.4 考察	
4.4.1 スクールカウンセラーの基礎的特性について	
4.4.2 スクールカウンセラーの意識について	
4.4.3 スクールカウンセラーの要望と提言について	
5 研究のまとめと今後の課題	47
5.1 研究のまとめ	
5.2 今後の課題	
6 補助資料	50
6.1 調査用紙1(スクールカウンセラー配置校用)	
6.2 調査用紙2(スクールカウンセラー用)	
6.3 各調査項目の集計結果表(調査用紙1)	
6.4 各調査項目の集計結果表(調査用紙2)	

# スクールカウンセラーの効果的な活用に向けての調査研究

## 研究の概要

文部科学省は、平成 13 年度から 5 年間で、スクールカウンセラーを全国のすべての公立中学校に配置する方針を打ち出した。その方針を受けて、宮城県では中学校へのスクールカウンセラーの配置を毎年拡充するとともに、高校へのスクールカウンセラーの配置も独自に進めてきた。

このスクールカウンセラー制度は、単にいじめや不登校問題の克服だけでなく、スクールカウンセラーの支援による教師の資質向上や、スクールカウンセラーを通しての学校、家庭、地域の連携の強化等、学校教育の機能やシステムを改善する端緒にもなり得る。その意味で、このスクールカウンセラーを学校現場でどのように活用していくかは、これからの学校教育の大きな課題であるといえる。

そこで、今年度の教育相談班所員研究では、研究主題を「スクールカウンセラーの効果的な活用に向けての調査研究」として、県内のスクールカウンセラー配置校 102 校と配置されたスクールカウンセラー 57 名を対象に、スクールカウンセラー活用の実態調査及び意識調査を実施した。

まず、スクールカウンセラー配置校を対象とした調査研究では、スクールカウンセラー活動や配置校の教育相談環境等がどのような実態になっているか、配置校がスクールカウンセラー活動をどのように認識・評価しているか、の 2 点を中心に分析するとともに、それらの関連性を解析することで、スクールカウンセラー活用に影響する要因を明らかにした。さらに、配置校の成功事例や要望・意見等について検討・整理した。

次に、スクールカウンセラーを対象とした調査研究では、スクールカウンセラーの基礎的特性を分析するとともに、現在の勤務状況や勤務校の教育相談環境をスクールカウンセラーがどのように認識・評価しているかを解析した。また、スクールカウンセラー側からの要望や提言について検討・整理した。

本研究は、これら 2 つの調査研究をとおして、宮城県におけるスクールカウンセラーの効果的な活用に向けた課題と展望を明らかにすることを目指した取組である。

## キーワード

スクールカウンセラー配置校の教育相談環境      スクールカウンセラーの基礎的特性  
スクールカウンセラー配置校の認識・評価      スクールカウンセラーの認識・評価

## 1 研究の趣旨

文部省（現・文部科学省）が、心理臨床の専門家をスクールカウンセラー（以降ＳＣと略記）として各学校に派遣する「ＳＣ活用調査研究委託事業」をスタートさせたのは、平成７年度であった。その後、文部科学省は、毎年ＳＣの派遣数を増やすとともに、この委託事業の調査研究で得られた成果や課題を踏まえ、平成１３年度から５年間で、ＳＣを全国のすべての公立中学校（３学級以上の規模）に配置する方針を打ち出した。これは、試験的にＳＣが配置されていた従来からの形から、本格的な制度化に向けてスタートしたことを意味するものといえる。

この文部科学省の方針を受けて、宮城県では中学校へのＳＣ配置を毎年拡充するとともに、高校へのＳＣ配置も独自に進めてきた。特に、来年度はすべての公立高校にＳＣを配置する予定にもなっている。

ところで、『平成１１・１２年度及び１２年度ＳＣ活用調査研究委託研究収録』（文部科学省）から、各配置校におけるＳＣの活動状況を見てみると、次のようなことが挙げられている。

カウンセリングルーム等での児童生徒に対する個別カウンセリングの他、休み時間の相談・声掛け等日常的な場面での相談活動。

教職員や保護者の指導上の悩みや不安に対し、臨床心理の専門家の立場からのコンサルテーションを実施する等の助言、援助活動。

教職員や保護者との懇談等の機会を通じた、カウンセリング等により得られる児童生徒の悩みや不安の傾向・地域特性等についての情報提供・交換活動。

地域住民を対象とした講演会等の機会に、カウンセリングの適切な知識・技術を提供する等、カウンセリングの重要性の理解促進を図る活動等。

ＳＣの学校現場への導入は、いじめや不登校問題への対策が大きな目的であったことは周知の通りである。しかし、これらの活動状況を見ると、単にいじめや不登校問題の克服だけでなく、ＳＣの支援による教師の資質向上や、ＳＣを通しての学校、家庭、地域の連携の強化等、学校教育の機能やシステムを改善する端緒にもなり得ることが分かる。

その意味で、このＳＣを学校現場でどのように活用していくかは、これからの学校教育の大きな課題であるといえるが、現在のところ、宮城県内の各配置校におけるＳＣ活動はまだ手探りの状態にある。ＳＣは配置校ごとに年齢や経験等が異なり、配置校における教育相談環境も各校で異なっていると推測され、ＳＣ活動が有効に機能しているかどうかを判断する手だても少ない状況にある。

そこで、今年度の教育相談班所員研究では、研究主題を「ＳＣの効果的な活用に向けての調査研究」として、県内のＳＣ配置校１０２校と配置されたＳＣ５７名を対象に、ＳＣ活用の実態調査及び意識調査を実施することとした。そして、ＳＣ活用の実態やＳＣの基礎的特性を把握するとともに、各配置校がどのような意識をもちながらＳＣを活用しているか、また各ＳＣがどのような意識をもちながらＳＣ活動に取り組んでいるかを分析・考察することによって、ＳＣの効果的な活用に向けた課題と展望を明らかにしたい。

## 2 調査研究について

### 2.1 調査目的

本研究は、S C 配置校における S C 活用の実態調査や、S C 活動に対する S C 配置校及び S C の意識調査を通して、S C の効果的な活用に向けた課題と展望を明らかにすることを目的とした。

### 2.2 調査対象

平成 14 年度の宮城県内の S C 配置校 102 校（中学校 44 校 高校 58 校）と配置された S C 57 名を調査対象とした。また、複数校を担当している S C には、いずれか 1 校を想定して回答いただいた。

### 2.3 調査時期

調査は平成 14 年 9 月から 10 月にかけて実施した。9 月に S C 配置校 102 校と S C 57 名に調査用紙を送付し、10 月に郵送等で回収した。なお、回収率は 100 % であった。

### 2.4 調査内容

調査用紙 1（S C 配置校用）と調査用紙 2（S C 用）を作成した。各質問項目は、これまでの先行研究を参考にしながら、本調査の目的に合わせて考案した。調査用紙 1 は、S C 配置校における S C 活用の実態を把握するための質問項目と、S C 活動に対する S C 配置校の認識・評価を問う質問項目等で構成した。また調査用紙 2 は、S C の基礎的特性を把握するための質問項目と、S C 活動に対する S C の認識・評価を問う質問項目等で構成した。なお、データ分析には、S P S S 社の統計処理ソフト S P S S 11.0 J を使用した。

### 2.5 調査者

本調査は、宮城県教育研修センター教育相談班が実施したものであるが、宮城教育大学教育学部助教授の佐藤静氏に研究協力を依頼した。なお、「4 S C を対象とした調査」は佐藤静氏が執筆を担当し、それ以外の部分は教育相談班が担当した。

### 3 S C 配置校を対象とした調査

#### 3.1 目的

S C は配置校ごとに年齢や経験等が異なり，配置校における教育相談環境も各校で異なっていると推測される。こうした状況において，配置校がどのような意識をもちながら S C を活用しているかを知ることは，今後のスクールカウンセリング事業の在り方を検討するに当たって必要であると考えられる。

本調査では，S C 活動や配置校の教育相談環境等がどのような実態になっているか，配置校が S C 活動をどのように認識・評価しているか，の 2 点を中心に分析するとともに，それらの関連性を解析することで，S C 活用に影響する要因を明らかにする。さらに，配置校の成功事例や要望・意見等について検討・整理する。

#### 3.2 方法

対象は宮城県内の S C 配置校 102 校（中学校 44 校 高校 58 校）であった。調査用紙（補助資料参照）を用いて，各配置校に回答を求めた。調査用紙の内容は，S C 活動の内容や配置校の教育相談環境等の実態を把握するための 19 の質問項目と，1（=とても当てはまる）から 5（=全く当てはまらない）までの 5 件法で回答する 35 の意識調査項目及び成功事例や要望・意見等に関する自由記述式回答による質問項目で構成した。調査は平成 14 年 9 月から 10 月にかけて行い，調査用紙は郵送等で回収した。回収率は 100 % であった。

#### 3.3 結果

##### 3.3.1 回答者

回答者は全体で，教育相談担当 45.1 %，生徒指導主事（高校は生徒指導部長）24.5 %，養護教諭 16.7 %，教頭 7.8 %，教務主任 2.0 % であった。その他の回答者としては，教育相談部長や保健主事，適応指導担当等があった。中学校・高校別の回答者の構成は，図 1 のとおりである。

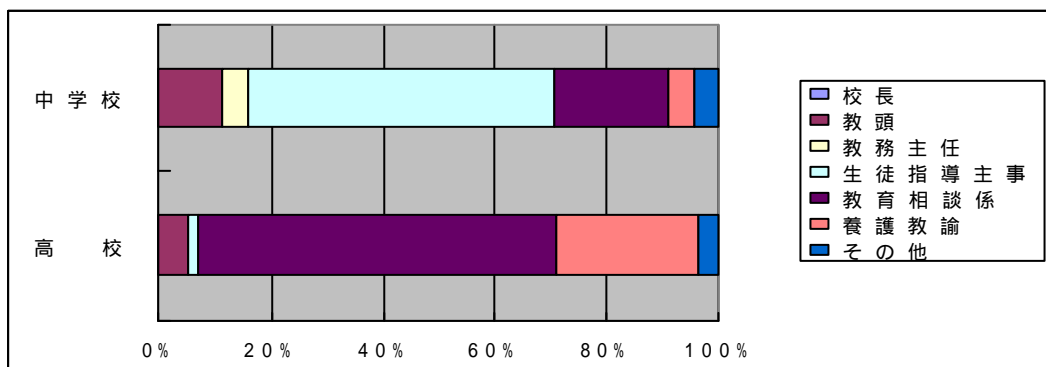


図 1 中学校・高校別の回答者の構成

### 3.3.2 SC配置校におけるSC活用の実態調査

#### (1) SCの基礎的特性

##### SCの性別と年齢構成

各学校に配置されたSC（延べ人数）の性別構成は全体で、男性 24.5 %（中学 25.0 %，高校 24.1 %），女性 75.5 %（中学 75.0 %，高校 75.9 %）であった。また、年齢構成は全体で、20 歳代 39.2 %，30 歳代 15.7 %，40 歳代 16.7 %，50 歳代 22.5 %，60 歳以上 5.9 %であった。中学校・高校別の年齢構成は、図 2 のとおりである。

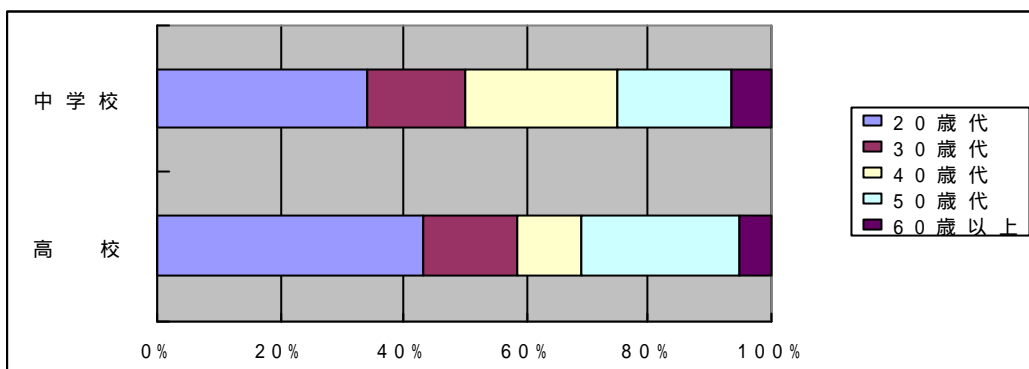


図 2 SC（延べ人数）の中学校・高校別の年齢構成

##### SCのSC経験年数

各学校に配置されたSC（延べ人数）のSC経験年数は全体で、1年以下の者 18.6 %，2～3年の者 42.2 %，4～5年の者 14.7 %，6～7年の者 17.6 %，8～9年の者 1.0 %，10年以上の者 5.9 %であった。中学校・高校別のSC経験年数の構成は、図 3 のとおりである。

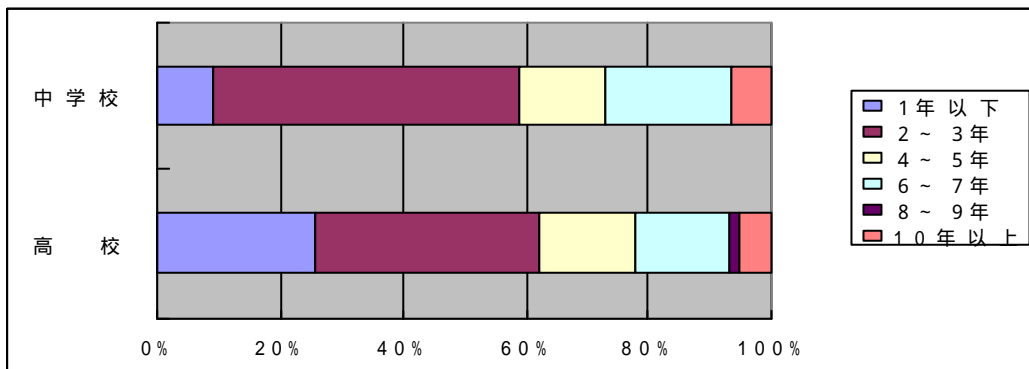


図 3 SC（延べ人数）の中学校・高校別のSC経験年数の構成

##### SCの資格と職歴（複数選択）

各学校に配置されたSC（延べ人数）の資格の有無は全体で、臨床心理士 60.8 %，教員免許 29.4 %，特になし 21.6 %，その他 6.9 %であった。その他の資格としては、各種学会認定カウンセラー，産業カウンセラー，精神保健福祉士等があった。中学校・高校別の資格取得の状況（%）は、図 4 のとおりである。また、職歴は全体で、教職経験 7.8 %，大学勤務 19.6 %，病院勤務 33.3 %，相談機関勤務 51.0 %であった。その他の職歴としては、精神障害者福祉施設，カルチャーセンター講師，心の教室相談員等があった。中学校・高校別の職歴（%）は、図 5 のとおりである。

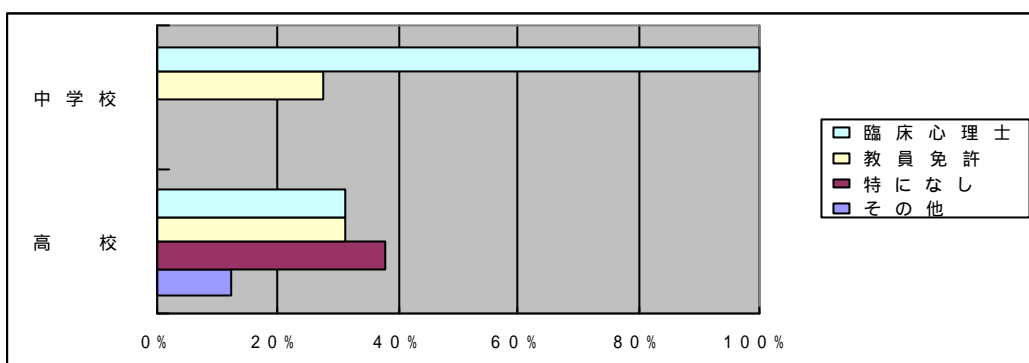


図4 S C (延べ人数)の中学校・高校別の資格取得

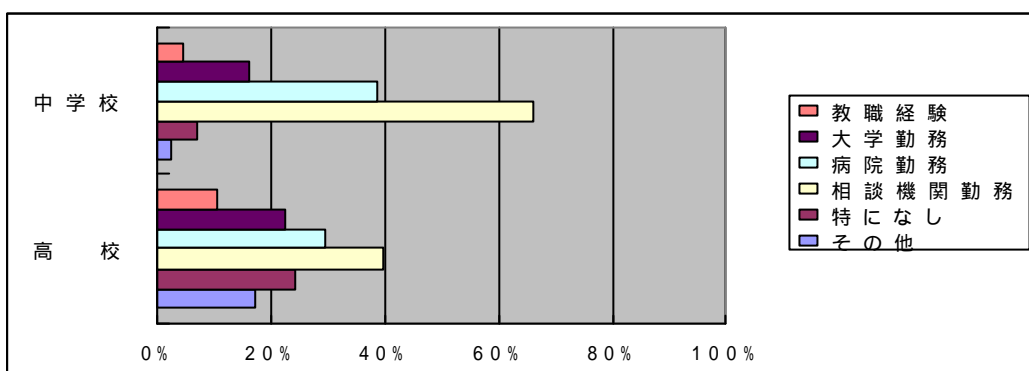


図5 S C (延べ人数)の中学校・高校別の職歴

(2) 学校の教育相談環境

S C 配置の経過年数

S C が配置された経過年数は全体で、1年目 21.6 %、2年目 24.5 %、3年目 16.7 %、4年目 13.7 %、5年目 4.9 %、6年以上 18.6 %であった。中学校・高校別のS C 配置経過年数の構成は、図6のとおりである。

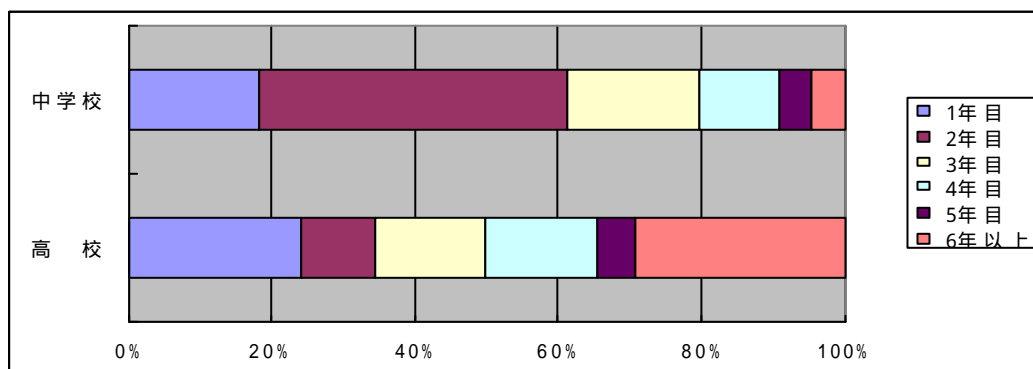


図6 中学校・高校別のS C 配置経過年数の構成

S C の担当者

S C との連絡・調整の担当者は全体で、教頭 7.8 %、教務主任 1.0 %、生徒指導主事 22.5 %、教育相談係 46.1 %、養護教諭 19.6 %であった。その他の担当者としては、教育相談部長や保健主事、保健厚生部長等があった。中学校・高校別のS C 担当者の構成は、図7のとおりである。

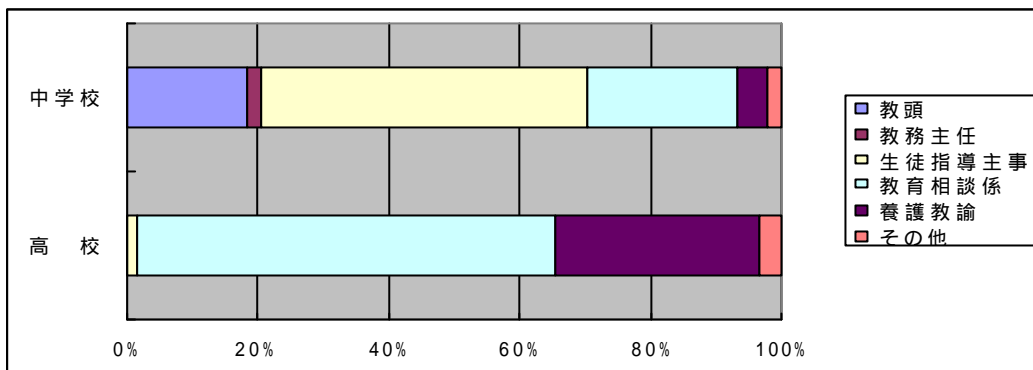


図7 中学校・高校別のSC担当者の構成

SCの受け入れ体制（複数選択）

SCを受け入れるに当たって行っていることは全体で、「SC活動のルールについて教職員の共通理解を図る」89.2%、「SCと教職員の顔合わせの時間を確保する」63.7%、「SCを全校集会等で生徒に紹介する」74.5%、「SCをプリント等で保護者に紹介する」89.2%、「カウンセリング専用の相談室を用意する」89.2%、「職員室にSCの机を用意する」49.0%、「相談室に直通電話を設置する」49.0%であった。その他に行っていることとしては、「カウンセリング専用ポストの設置」「保護者会等で直接本人を紹介する」「SCをプリント等で生徒に紹介する」「相談室の清掃・美化、湯茶の準備」等があった。中学校・高校別のSC受け入れ体制（%）は、図8のとおりである。

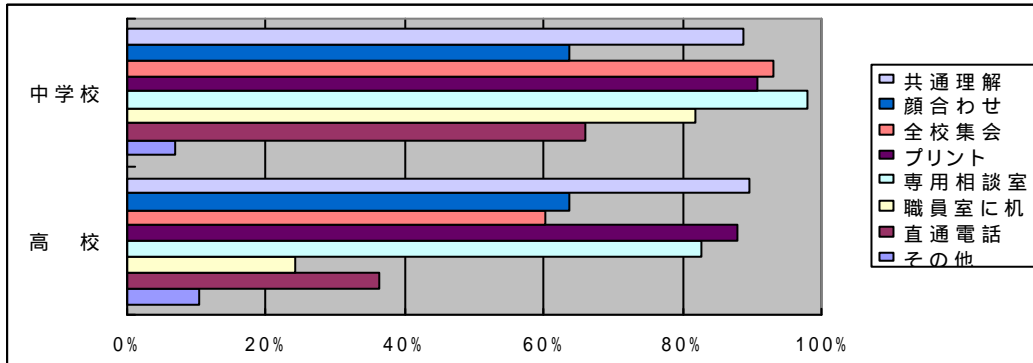


図8 中学校・高校別のSC受け入れ体制

SC来校日の知らせ方（複数選択）

SC来校日の生徒への知らせ方は全体で、「各クラスごとに学級担任が知らせる」39.2%、「掲示板や便りで知らせる」92.2%、「特に知らせる手だては講じていない」2.0%であった。その他の知らせ方としては、「校内放送で知らせる」「週初めの全校集会で連絡」「個別に声掛け」等があった。中学校・高校別のSC来校日の知らせ方（%）は、図9のとおりである。

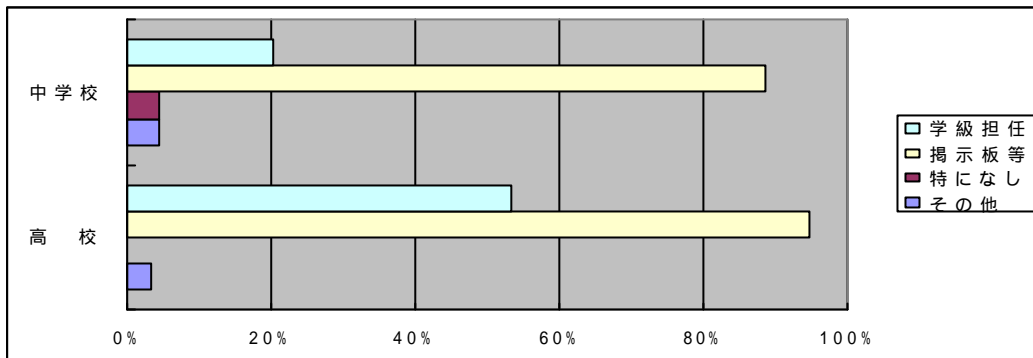


図9 中学校・高校別のS C来校日の知らせ方

#### 授業中の面談の取扱い

授業中の面談の取扱いは全体で、「公認扱いにして面談を認めている」57.8%、「授業を欠課扱いにして面談を認めている」8.8%、「原則として授業中の面談は認めていない」29.4%であった。その他の取扱いとしては、「生徒指導主事か養護教諭が窓口となり認めている」「急を要するものは認めている」等があった。中学校・高校別の授業中の面談取扱いの構成は、図10のとおりである。

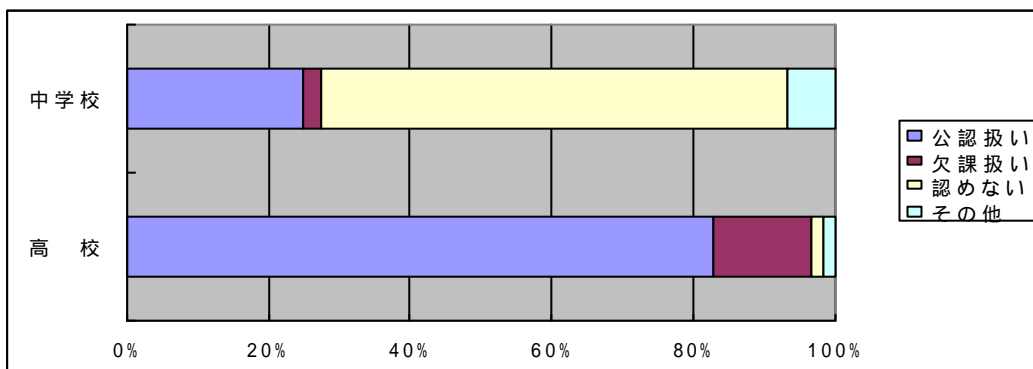


図10 中学校・高校別の授業中の面談取扱いの構成

#### 面談後の情報交換

S.C.の面談が終わった後の情報交換は全体で、「S.CとS.C担当者が情報交換を行う」15.7%、「S.Cと相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」15.7%、「S.C、S.C担当者及び相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」64.7%、「特に情報交換はしていない」2.9%であった。その他の情報交換としては、「報告ノートによる情報交換」があった。中学校・高校別の面談後の情報交換の構成は、図11のとおりである。

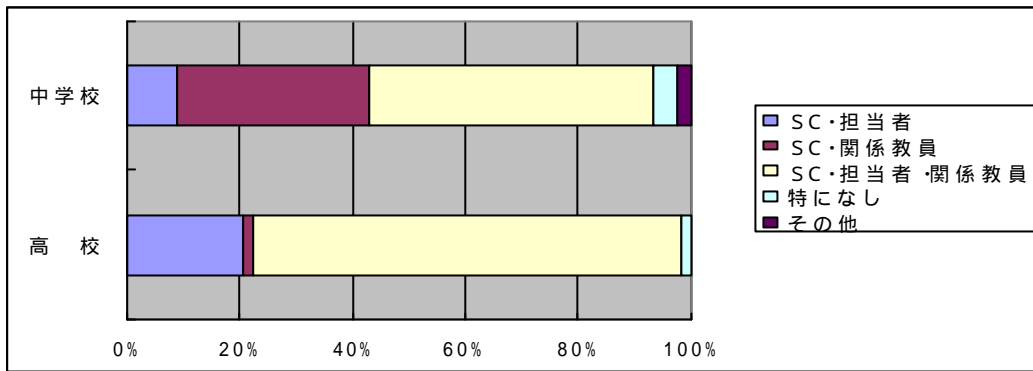


図11 中学校・高校別の面談後の情報交換の構成

### SCと教職員の連絡会

SCと教職員の連絡会の開催頻度は全体で、「年1回」19.6%、「年2回」19.6%、「年3回」10.8%、「年4回以上」20.6%、「特に何もしていない」29.4%であった。中学校・高校別の連絡会の開催頻度の構成は、図12のとおりである。

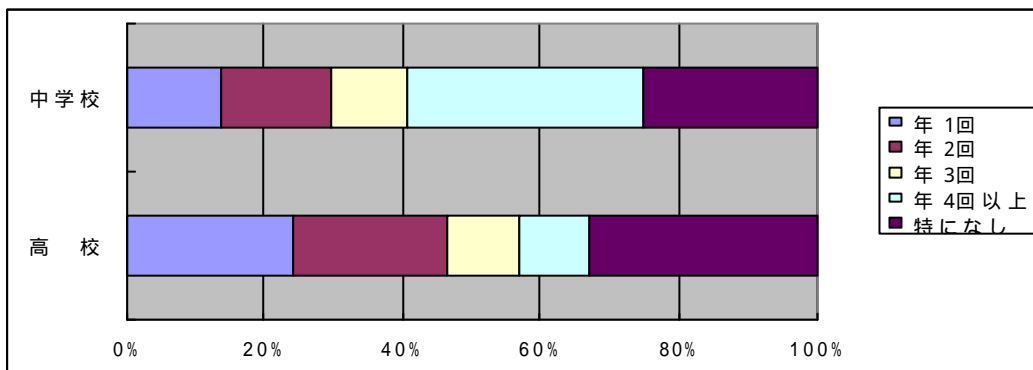


図12 中学校・高校別の連絡会の開催頻度の構成

### 面談で知り得た情報の管理 / 共有の形態

SCの面談で知り得た情報を管理 / 共有する形態は全体で、「SCのみ」5.9%、「SC・SC担当者」10.8%、「SC・相談ケースに関する教員」12.7%、「SC・SC担当者・相談ケースに関する教員」38.2%、「SC・SC担当者・相談ケースに関する教員・教頭・校長」18.6%、「その他」13.7%であった。中学校・高校別の面談情報の管理 / 共有の形態は、図13のとおりである。

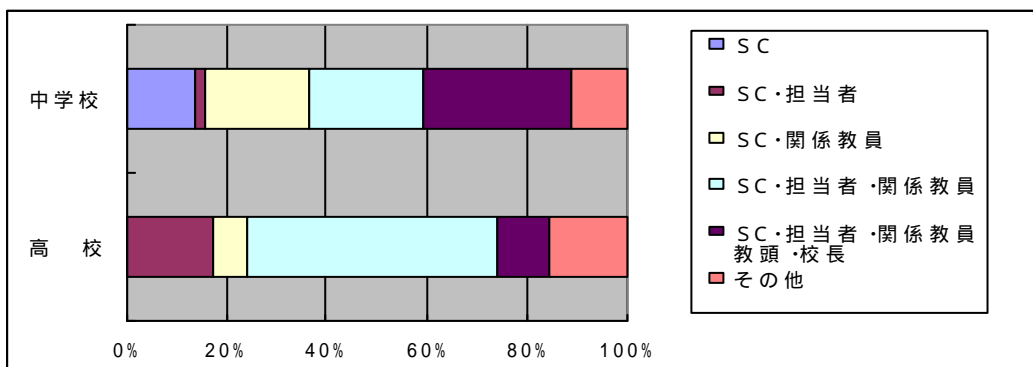


図13 中学校・高校別の面談情報の管理 / 共有形態の構成

### (3) S Cの勤務内容

#### S Cの仕事内容（複数選択）

S Cが実際に行っている仕事内容は全体で、「生徒との面談」100%、「保護者との面談」94.1%、「心理アセスメント」15.7%、「教職員との情報交換」95.1%、「事例検討会等での助言」23.5%、「保護者対象の研修会」21.6%、「教職員対象の研修会」57.8%、「広報活動」52.9%、「授業等でのTT活動」2.9%、「専門機関との連絡・調整」28.4%であった。その他の仕事内容としては、「日常的な生徒との交流」「集団カウンセリング」「学校行事への参加」等があった。中学校・高校別のS Cの仕事内容（%）は、図14のとおりである。

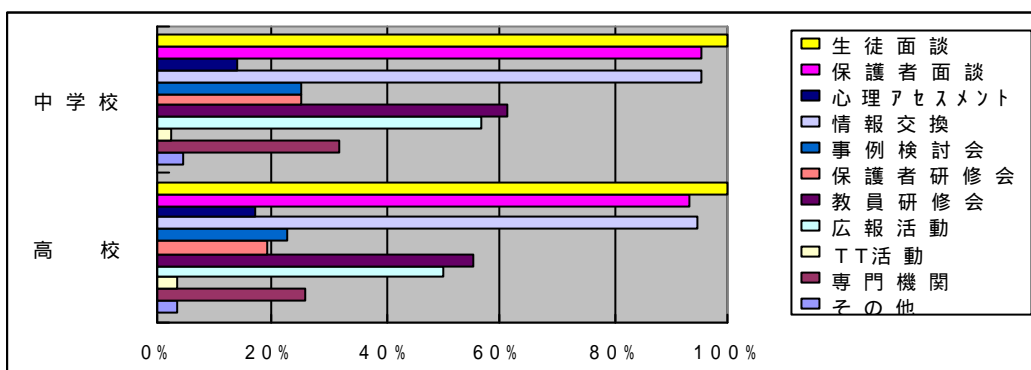


図14 中学校・高校別のS Cの仕事内容

#### S Cに期待する仕事内容（複数選択）

S Cに期待する仕事内容は全体で、「生徒との面談」92.2%、「保護者との面談」89.2%、「心理アセスメント」27.5%、「教職員との情報交換」81.4%、「事例検討会等での助言」55.9%、「保護者対象の研修会」44.1%、「教職員対象の研修会」78.4%、「広報活動」50.0%、「授業等でのTT活動」22.5%、「専門機関との連絡・調整」57.8%であった。その他の期待する仕事内容としては、「日常的な生徒との交流」「集団カウンセリング」等があった。中学校・高校別のS Cに期待する仕事内容（%）は、図15のとおりである。

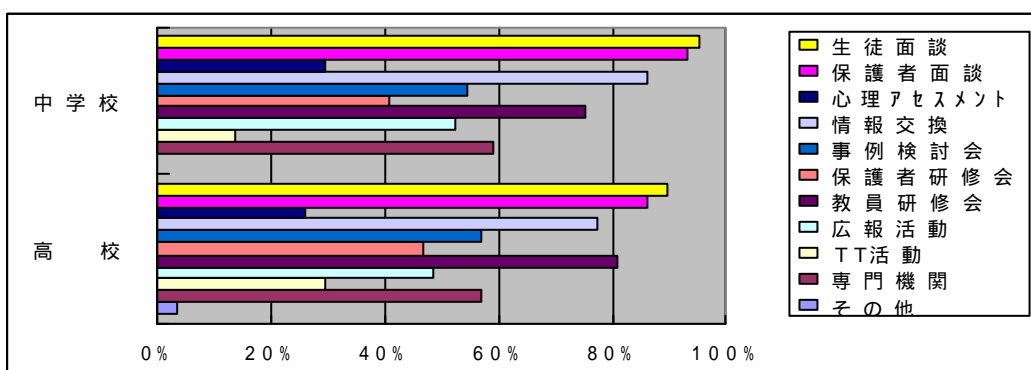


図15 中学校・高校別のS Cに期待する仕事内容

### (4) S Cの勤務時間

#### 現在のS Cの勤務時間

現在のS Cの勤務時間は、中学校が「1日8時間・週1回」93.2%、「その他」6.8%（「1日4時間・週2回」等）、高校が「1日6時間・月2回」65.5%、「1日6時間・月1回」34.5%

%であった。また、この勤務時間について、「多い」0%、「ちょうどよい」37.3%、「少ない」62.7%であった。中学校・高校別のS C勤務時間に対する意識内容の構成は、図16のとおりである。

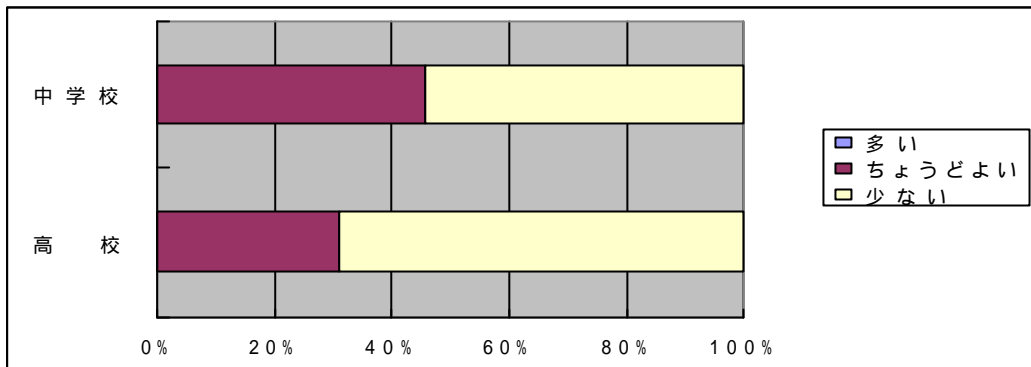


図16 中学校・高校別のS C勤務時間に対する意識内容の構成

S Cの勤務時間を増やしたい理由（複数選択： で「少ない」を選択した学校のみが回答）

S Cの勤務時間を増やしたい理由は全体で、「生徒との面談の時間の確保」93.8%、「保護者との面談の時間の確保」70.3%、「心理アセスメントの実施」12.5%、「教職員との情報交換の時間確保」75.0%、「事例検討会等での助言の機会確保」26.6%、「保護者対象の研修会の実施」20.3%、「教職員対象の研修会の実施」35.9%、「広報活動の実施」12.5%、「授業等でのTT活動の実施」20.3%、「専門機関との連絡・調整」12.5%であった。中学校・高校別のS C勤務時間を増やしたい理由（%）は、図17のとおりである。

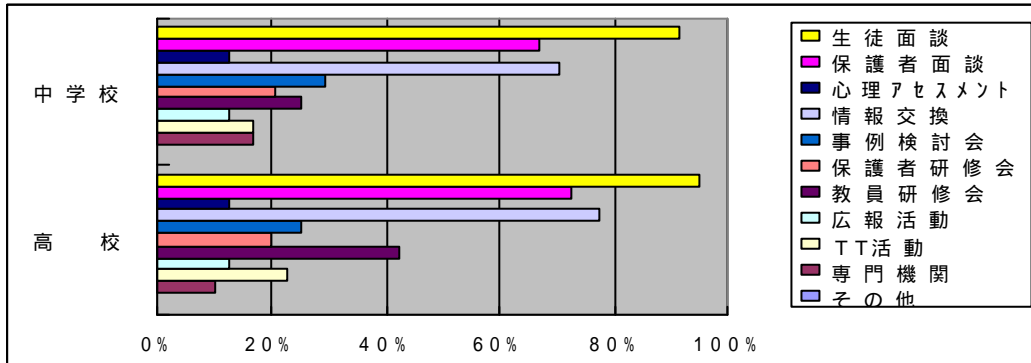


図17 中学校・高校別のS C勤務時間を増やしたい理由

希望するS Cの勤務時間（ で「少ない」を選択した学校のみが回答）

希望するS Cの勤務時間は全体で、週1回37.5%、週2回37.5%、週3回6.3%、週4回以上7.8%であった。その他の希望勤務時間としては、月2回、月3回、週2回（1日4時間）があった。中学校・高校別の希望するS C勤務時間の構成は、図12のとおりである。

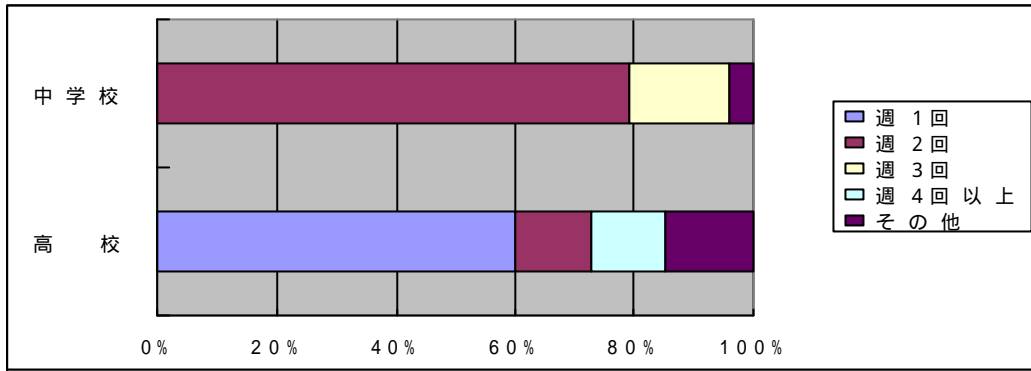


図18 中学校・高校別の希望するSC勤務時間の構成

### 3.3.3 SC配置校の意識調査

#### (1) 各質問項目に対する回答

個々の質問項目（ア～モの35項目）に対する回答結果は「6.3 各調査項目の集計結果表（調査用紙1）」に掲載したが、各質問項目を回答中央値の大きさ（1～5）によって分類すると、以下のとおりであった。

回答中央値が1を示した質問項目は、「SCによって救われる生徒がいる」「専門家だという安心感がある」の2項目であった。

回答中央値が2を示した質問項目のうち、肯定的な意味をもつ質問項目は、「SCは教職員の中にとけこんでいる」「SCと教職員との協力関係はうまくいっている」「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」「SCの役割や機能は教職員によく周知されている」「SCの役割や機能は生徒によく周知されている」「生徒の心理面の援助になる」「保護者の心理面の援助になる」「教師の生徒指導の負担が軽くなる」「成績評価とは関係がないので生徒や保護者は気軽に相談できる」「生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」「教師の生徒理解が深まる」「教師のメンタルケアに役立つ」「教師とは異なった専門的な見方を知ることができる」「専門機関と連携がしやすくなる」「面談で知り得た情報の管理/共有の方法は適切である」の16項目で、否定的な意味をもつ質問項目は、「学校にはSCと十分な情報交換を行う時間的余裕がない」「SCの来校日が少ないので十分な情報交換ができない」「学校には研修会や事例検討会等を行う時間的余裕がない」の3項目であった。

回答中央値が2.5を示した質問項目は、「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」の1項目であった。

回答中央値が3を示した質問項目は、「SCの役割と機能は保護者によく周知されている」「生徒や保護者にはカウンセリングに対する抵抗感がある」「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」「SCが不登校以外の暴力や非行問題に対応することは難しい」「教師のカウンセリングの資質が向上する」「学校として職場のチームワークがよくなる」の6項目であった。

回答中央値が4を示した質問項目は、「SCの考え方ややり方に戸惑うことがある」「教師にはカウンセリングに対する抵抗感がある」「SCと教師の考えが一致せず生徒によくない影響が出る」「教師には生徒が面談を受けることを快く思わない雰囲気がある」「生

徒が面談を受けると担任としての力量が問われる不安がある」の5項目で、いずれも否定的な意味をもつ質問項目であった。

回答中央値が5を示した質問項目は、「SCに生徒のことを相談するのは不安である」「SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる」の2項目であった。

## (2) 群特性による比較

### 回答者群による比較

教頭・教務主任群(10人)、生徒指導主事群(25人)、教育相談係群(46人)、養護教諭群(17人)の4群の各項目(ア～モの35項目)の回答値について、Kruskal Wallis 検定<sup>1</sup>を行った。その結果、以下の5項目で有意差が認められた。

「生徒の心理面の援助になる」では、教頭・教務主任群の平均回答値は1.90(平均ランクは53.80)、生徒指導主事群の平均回答値は1.88(平均ランクは60.72)、教育相談係群の平均回答値は1.48(平均ランクは45.22)、養護教諭群の平均回答値は1.41(平均ランクは42.02)であり、それらの差は有意であった( $\chi^2 = 8.284, df = 3, p < .005$ )。

「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」では、教頭・教務主任群の平均回答値は3.00(平均ランクは49.90)、生徒指導主事群の平均回答値は3.68(平均ランクは65.96)、教育相談係群の平均回答値は2.61(平均ランクは40.35)、養護教諭群の平均回答値は3.00(平均ランクは49.82)であり、それらの差は有意であった( $\chi^2 = 14.041, df = 3, p < .003$ )。

「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」では、教頭・教務主任群の平均回答値は2.40(平均ランクは62.90)、生徒指導主事群の平均回答値は2.16(平均ランクは56.60)、教育相談係群の平均回答値は1.93(平均ランクは48.15)、養護教諭群の平均回答値は1.59(平均ランクは34.82)であり、それらの差は有意であった( $\chi^2 = 10.475, df = 3, p < .02$ )。

「教師のメンタルケアに役立つ」では、教頭・教務主任群の平均回答値は2.50(平均ランクは59.35)、生徒指導主事群の平均回答値は2.44(平均ランクは58.82)、教育相談係群の平均回答値は2.07(平均ランクは44.53)、養護教諭群の平均回答値は2.06(平均ランクは43.44)であり、それらの差は有意であった( $\chi^2 = 8.157, df = 3, p < .05$ )。

「専門家だという安心感がある」では、教頭・教務主任群の平均回答値は2.10(平均ランクは69.25)、生徒指導主事群の平均回答値は1.56(平均ランクは53.54)、教育相談係群の平均回答値は1.41(平均ランクは46.16)、養護教諭群の平均回答値は1.35(平均ランクは40.97)であり、それらの差は有意であった( $\chi^2 = 9.734, df = 3, p < .03$ )。

### 中学校群と高校群の比較

中学校群(44校)と高校群(58校)に分け、SC配置校の各項目(ア～モの35項目)の回答値について、Mann-Whitney U 検定<sup>2</sup>を行った。その結果、以下の6項目で有意差が認められた。

<sup>1</sup> Kruskal Wallis 検定とは、3つ以上の群の回答の差が誤差の範囲なのか、確かに意味のある(有意な)違いであるかを判定する統計分析の方法の1つ。確率値  $p$  が  $< .05$  なら、各群の回答の差に違いがない確率は5%以下であり、かなり確かに各群の回答傾向には違いがあるといえる。

<sup>2</sup> Mann-Whitney U 検定とは、2つの群の回答の差が誤差の範囲なのか、確かに意味のある(有意な)違いであるかを判定する統計分析の方法の1つ。

「SCは教職員の中にとけこんでいる」では、中学校群の回答平均値は 2.14 (平均ランクは 41.49), 高校群の回答平均値は 2.71 (平均ランクは 59.09) であり, その差は有意であった ( $U = 835.500, W = 1825.500, Z = - 3.156, p < .002$ )。

「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」では, 中学校群の回答平均値は 1.95 (平均ランクは 58.13), 高校群の回答平均値は 1.62 (平均ランクは 46.47) であり, その差は有意であった ( $U = 984.500, W = 2695.500, Z = - 2.135, p < .04$ )。

「生徒の心理面の援助になる」では, 中学校群の回答平均値は 1.84 (平均ランクは 59.82), 高校群の回答平均値は 1.45 (平均ランクは 45.19) であり, その差は有意であった ( $U = 910.000, W = 2621.000, Z = - 2.826, p < .005$ )。

「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」では, 中学校群の回答平均値は 3.55 (平均ランクは 64.70), 高校群の回答平均値は 2.59 (平均ランクは 41.48) であり, その差は有意であった ( $U = 695.000, W = 2406.000, Z = - 4.053, p < .001$ )。

「教師のメンタルケアに役立つ」では, 中学校群の回答平均値は 2.39 (平均ランクは 57.50), 高校群の回答平均値は 2.10 (平均ランクは 46.95) であり, その差は有意であった ( $U = 1012.000, W = 2723.000, Z = - 2.061, p < .04$ )。

「SCの来校日数が少ないので十分な情報交換ができない」では, 中学校群の回答平均値は 2.68 (平均ランクは 58.50), 高校群の回答平均値は 2.24 (平均ランクは 46.19) であり, その差は有意であった ( $U = 968.000, W = 2679.000, Z = - 2.150, p < .04$ )。

#### 男性SC配置校と女性SC配置校の比較

男性SC配置校(25校)と女性SC配置校(77校)に分け, SC配置校の各項目(ア～モの35項目)の回答値について, Mann-Whitney U検定を行った。その結果, 以下の4項目で有意差が認められた。

「SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる」では, 男性SC配置校の回答平均値は 4.28 (平均ランクは 41.06), 女性SC配置校の回答平均値は 4.56 (平均ランクは 54.89) であり, その差は有意であった ( $U = 701.500, W = 1026.500, Z = - 2.322, p < .03$ )。

「生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある」では, 男性SC配置校の回答平均値は 2.08 (平均ランクは 61.64), 女性SC配置校の回答平均値は 1.77 (平均ランクは 48.21) であり, その差は有意であった ( $U = 709.000, W = 3712.000, Z = - 2.174, p < .04$ )。

「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」では, 男性SC配置校の回答平均値は 2.24 (平均ランクは 61.32), 女性SC配置校の回答平均値は 1.92 (平均ランクは 48.31) であり, その差は有意であった ( $U = 717.000, W = 3720.000, Z = - 2.128, p < .04$ )。

「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」では, 男性SC配置校の回答平均値は 2.16 (平均ランクは 39.28), 女性SC配置校の回答平均値は 2.69 (平均ランクは 55.47) であり, その差は有意であった ( $U = 657.000, W = 982.000, Z = - 2.543, p < .02$ )。

#### SCの年齢層による比較

SC配置校全102校について, 配置されたSCの年齢(5段階)と各項目(ア～モの35項目)の回答値の Spearman 相関係数<sup>3</sup>を求めた。その結果, 以下の1項目で有意な正の相関が認められた。

「SCの来校日数が少ないので十分な情報交換ができない」( $r = .209, p < .04$ )

#### SCのSC経験年数による比較

SC配置校全102校について、配置されたSCのSC経験年数(6段階)と各項目(ア～モの35項目)の回答値のSpearman相関係数を求めた。その結果、いずれも有意な相関は認められなかった(統計値は省略)。

#### SCの資格による比較

「臨床心理士」有資格群(62校)と「臨床心理士」無資格群(40校)に分け、SC配置校の各項目(ア～モの35項目)の回答値について、Mann-Whitney U検定を行った。その結果、以下の2項目で有意差が認められた。

「SCは教職員の中にとけこんでいる」では、「臨床心理士」有資格群の回答平均値は2.27(平均ランクは45.61)、「臨床心理士」無資格群の回答平均値は2.75(平均ランクは60.63)であり、その差は有意であった( $U = 875.000$ ,  $W = 2828.000$ ,  $Z = -2.653$ ,  $p < .008$ )。

「生徒の心理面での援助になる」では、「臨床心理士」有資格群の回答平均値は1.74(平均ランクは56.31)、「臨床心理士」無資格群の回答平均値は1.43(平均ランクは44.04)であり、その差は有意であった( $U = 941.500$ ,  $W = 1761.500$ ,  $Z = -2.338$ ,  $p < .02$ )。

#### SCの職歴による比較

有職歴群(85校)と無職歴群(17校)に分け、SC配置校の各項目(ア～モの35項目)の回答値について、Mann-Whitney U検定を行った。その結果、以下の5項目で有意差が認められた。

「保護者の心理面の援助になる」では、有職歴群の回答平均値は1.72(平均ランクは49.04)、無職歴群の回答平均値は2.12(平均ランクは63.79)であり、その差は有意であった( $U = 513.500$ ,  $W = 4168.500$ ,  $Z = -2.084$ ,  $p < .04$ )。

「SCによって救われる生徒がいる」では、有職歴群の回答平均値は1.36(平均ランクは48.61)、無職歴群の回答平均値は1.76(平均ランクは65.94)であり、その差は有意であった( $U = 477.000$ ,  $W = 4132.000$ ,  $Z = -2.591$ ,  $p < .02$ )。

「面談で知り得た情報の管理/共有の方法は適切である」では、有職歴群の回答平均値は1.71(平均ランクは48.78)、無職歴群の回答平均値は2.18(平均ランクは65.09)であり、その差は有意であった( $U = 491.500$ ,  $W = 4146.500$ ,  $Z = -2.299$ ,  $p < .03$ )。

「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」では、有職歴群の回答平均値は2.41(平均ランクは47.82)、無職歴群の回答平均値は3.29(平均ランクは69.88)であり、その差は有意であった( $U = 410.000$ ,  $W = 4065.000$ ,  $Z = -3.002$ ,  $p < .003$ )。

「教師のカウンセリングの資質が向上する」では、有職歴群の回答平均値は2.49(平均ランクは48.89)、無職歴群の回答平均値は2.88(平均ランクは64.53)であり、その差は有意であった( $U = 501.000$ ,  $W = 4156.000$ ,  $Z = -2.187$ ,  $p < .03$ )。

---

<sup>3</sup> Spearman相関係数( $r$ )とは、2つの要因の関連(相関)の強さを示す指標の1つであり、1から-1の間の値をとる。1が最大であり、0に近くなるほど関連の強さは小さくなる。関連の方向性(ベクトル)は符号で示される。マイナス(-)が付いた場合は片方の要因の値が大きくなるほど、他の要因の値が小さくなる関係があることを示す。プラス(+ )の記号は省略される。一般に、相関係数 $r$ が0.2未満の場合はほとんど関連がない、0.2から0.4までが少し関連がある、0.5から0.7までがかなり関連がある、0.7以上なら強い関連がある、と解釈される。

### SC配置の経過年数による比較

SC配置校全 102 校について、SC配置の経過年数（6段階）と各項目（ア～モの 35 項目）の回答値の Spearman 相関係数を求めた。その結果、以下の 9 項目で有意な負の相関がみられた。

「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」( $r = -.250, p < .02$ )、「生徒の心理面の援助になる」( $r = -.305, p < .002$ )、「保護者の心理面の援助になる」( $r = -.326, p < .001$ )、「教師の生徒指導の負担が軽くなる」( $r = -.274, p < .005$ )、「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」( $r = -.249, p < .02$ )、「教師のメンタルケアに役立つ」( $r = -.214, p < .04$ )、「SCによって救われる生徒がいる」( $r = -.220, p < .03$ )、「専門家だという安心感がある」( $r = -.212, p < .04$ )、「面談で知り得た情報の管理/共有の方法は適切である」( $r = -.294, p < .003$ )。

### 3.3.4 SC配置校の成功事例及び要望・意見等

SC活動で評価できること、SC活動における問題・課題、SC活動によって成功した指導事例、SC配置校の要望・意見の 4 点について、自由記述によって挙げられたものは次のとおりであった。重複する内容は整理して記した（カッコ内の数字は件数を示す）。

#### (1) SC活動で評価できること

##### 専門的貢献

専門的な立場から意見を聞くことができる（15）。専門機関と連携がしやすくなる（7）。専門性を生かした生徒への援助ができる（5）。広報活動によってカウンセリングに対する理解が深まる（4）。医療機関にリファーすべきケースを適切に判断できる（1）。

##### SCの適応状態

教師との協力関係がうまくいっている（1）。教師に気軽に話しかけてくれる（1）。休み時間や給食時間を利用して生徒との関係づくりに努めている（1）。

##### 教師への援助

教師のメンタルケアに役立つ（7）。生徒の問題行動に対する適切な助言がもらえる（7）。学級担任の負担が軽くなる（3）。面談情報によって生徒への適切な対応ができる（3）。教師対象の研修会が実施できる（3）。LHR等でのTT活動が可能である（2）。教師の多面的な生徒理解に役立つ（2）。生徒の問題行動の前兆を適切にとらえることができる（2）。養護教諭の負担が軽くなる（2）。指導上の決定的な過ちを回避できる（1）。

##### 生徒や保護者への援助

生徒の心理面の援助になる（8）。評価されないの生徒は安心して相談できる（4）。秘密が守られるので生徒は安心して相談できる（4）。一人の生徒にじっくり時間をとってかわってもらえる（3）。生徒の自己理解の援助になる（3）。保護者の心理面の援助になる（3）。問題を抱える生徒の保護者の支えになる（3）。問題を抱える生徒の心の支えになる（2）。保護者対象の研修会が実施できる（2）。保護者の養育態度や方法に対する適切な助言がもらえる（1）。

##### 学校組織への援助

開かれた学校づくりの雰囲気が生まれる（3）。生徒の問題行動に対する組織的対応がしやすくなる（3）。問題を抱え込まずに気軽に相談する雰囲気が生まれる（3）。

## (2) SC活動における問題・課題

### SCの勤務時間

SCの勤務時間が少ないので十分な情報交換の時間がとれない(15)。SCの勤務時間が少ないので十分な面談時間がとれない(12)。SCの勤務日の間隔が空くので継続した援助が難しい(8)。SCの勤務時間が少ないので研修会や事例検討会が企画できない(3)。

### SC活用の校内体制

SC活用の校内体制が整っていない(5)。面談情報を有効に活用していない(5)。授業中の面談を認めていないので面談時間の確保が難しい(4)。教師にはカウンセリングに対する抵抗感がある(4)。生徒や保護者への広報活動が不十分である(4)。カウンセリング専用の相談室が必要である(3)。SC活動に対する教師の共通理解が確立していない(3)。SCを全く利用しようとしなない教師がいる(2)。面談情報の管理/共有の方法が適切でない(1)。面談が入っていない日のSC活用が不十分である(1)。SCの考え方と教師の方針が一致しないことがある(1)。

### その他

経験の少ないSCでは教師の信頼が得られない(5)。SC活動の成否がSCの人柄や考え方に左右される(3)。面談利用が特定の生徒に独占される(2)。保護者にはカウンセリングに対する抵抗感がある(2)。不登校生徒の訪問カウンセリングができるようにしてほしい(2)。教師にはSCと十分な情報交換を行う時間的余裕がない(1)。生徒にはカウンセリングに対する抵抗感がある(1)。

## (3) SC活動によって成功した指導事例

### 専門的貢献

専門的な治療を要するケースを適切に判断して医療機関にリファーできた(9)。SCが専門機関と連絡をとり、学校と専門機関の連携が確立できた(3)。適切な就学指導によって、特殊学級を新設することができた(1)。

### 生徒や保護者への援助

子供の問題行動に悩む保護者を支えることができた(10)。定期的な面談によって、情緒不安定な生徒の学校生活が落ち着いた(8)。悩みを抱えた生徒が自分の気持ちを整理できた(8)。保護者の変容によって、生徒の問題行動が改善できた(5)。保護者の学校への不信感が緩和された(3)。運動部に属する生徒へのメンタルトレーニングによって、部活動が活性化した(3)。LHR等での講話によって、生徒のメンタルヘルスへの関心が高まった(1)。保護者対象の講演会によって、養育の在り方について適切な助言がもたらえた(1)。

### 不登校問題への対応

保健室登校や別室登校の生徒が学級に戻ることができた(10)。定期的な面談によって、不登校だった生徒が登校できるようになった(3)。電子メールのやりとりによって、不登校だった生徒が登校できるようになった(2)。休みがちな生徒との面談によって、不登校を未然に防ぐことができた(2)。

## (4) SC配置校の要望・意見

### SCの勤務時間

SCの勤務時間を増やしてほしい(26)。SCが相談室に常駐する勤務システムを実現

してほしい(1)。

#### SCの配置方法

専門家として力量のあるSCを配置してほしい(4)。SCはできるだけ長く同じ人を配置してほしい(2)。同じSCが長く続くとマンネリ化するので、適切な人事異動が必要(2)。SCの人事異動について、学校の希望を取り入れてほしい(1)。新しいSCが配置される場合は前もって打合せを十分にしたいので、早めに配置を決定してほしい(1)。1校1名のSC配置にしてほしい(1)。地域差のないSC配置を希望する(1)。すべての中学校へのSC配置を早期に実現してほしい(1)。

#### 教育相談環境の整備

相談室の改装や必要物品の購入のために予算を計上してほしい(3)。遠距離通勤や恒常的な超過勤務の状態にあるSCに給与面でもっと報いたい(2)。授業中の面談の取扱いについて、学校・生徒の実態に応じてではなく、積極的に奨励してほしい(2)。

#### SC連絡協議会のもち方

SCと担当教師の情報交換の時間をもっと増やしてほしい(2)。SCが複数校兼務の場合、学校間の調整のための機会を作してほしい(2)。SCからの要望や意見についてもっと生の声を聞きたい(1)。大講義室における多人数での分科会は会話が混線した状態なので、複数の部屋を用意してほしい(1)。

#### 研修会の開催

SCの力量や考え方に差があるので、SC研修をしっかりと行ってほしい(4)。SCの効果的な活用についての研修が必要(2)。集団守秘義務についてすべてのSCに徹底してほしい(1)。

#### その他

SCには、教師の生徒とのかかわり方等についても発言してほしい(1)。年度末の報告書が負担なので、毎月の相談状況報告書だけにしてほしい(1)。

### 3.4 考察

#### 3.4.1 回答者について

回答者を中学校・高校別にみると、中学校では教頭、教務主任、生徒指導主事を併せて7割以上を占め、高校では教育相談係と養護教諭を併せて約9割を占めた。この結果からは、中学校では学校全体のまとめ役が回答者となっている比率が高いのに対して、高校ではSCの窓口としての係が回答者となっていることが分かる。

#### 3.4.2 SC配置校におけるSC活用の実態について

##### (1) SCの基礎的特性

##### SCの性別、年齢、経験年数等

各学校に配置されたSC(延べ人数)の7割以上が女性であった。また、年齢構成では中学校・高校ともに20歳代、30歳代が半数以上を占め、SC経験年数についても3年以下の者が約6割を占めた。年齢が若く、経験も浅いSCの多いことが分かるが、この傾向は特に高校において顕著であった(20歳代43.1%、1年以下25.9%)。これは、ハイス

クールカウンセラー事業の任用条件に臨床心理士資格が義務付けられていないことから、臨床心理士を目指す大学院生や新卒者が多く任用されていることによると考えられる。

#### ＳＣの資格と職歴

臨床心理士の資格を有する者の比率は、中学校 100 %、高校 31 %であった。これは、中学校と高校の任用条件の違いによるものであるが、高校では、臨床心理士のみならず、他の資格も有しない者が約 4 割いることが分かった。また、職歴について中学校・高校別にみると、中学校では 6 割以上が相談機関の勤務経験があり、病院勤務も約 4 割あるのに対して（そのうち相談機関と病院の両方を経験している者は 18.2 %）、高校では相談機関勤務が約 4 割、病院勤務が約 3 割にとどまり（そのうち相談機関と病院の両方を経験している者は 13.8 %）、職歴を有しない者が 2 割以上いることが分かった。

これらの結果を、ＳＣの年齢や経験年数等と併せて考えると、今後のスクールカウンセリング事業を推進する上で、ＳＣの資質向上に向けた研修体制の整備や熟練したスーパーバイザーによるサポート等が大きな課題となることが予想される。

#### (2) 学校の教育相談環境

##### ＳＣ配置の経過年数

ＳＣ配置の経過年数を中学校・高校別にみると、中学校では 1～3 年目までの比率が約 8 割を占めているのに対して、高校ではその比率が約 5 割にとどまり、逆に 6 年以上の比率が約 3 割を占めた。宮城県教育研修センター教育相談班（当時は教育相談室）では、昭和 57 年より、宮城県内の 15 高校に専門カウンセラーを派遣して移動教育相談を実施してきた（平成 11 年度に廃止）。また、その他に、かなり以前から学校独自の予算で専門カウンセラーを委嘱する高校もある。ＳＣ配置の経過年数の長い高校が多い背景には、そういった理由が考えられる。

##### ＳＣの担当者

中学校のＳＣ担当者は、生徒指導主事の比率が最も高く（50.0 %）、次いで教育相談係（22.7 %）、教頭（18.2 %）の順であった。高校のＳＣ担当者は、教育相談係の比率が最も高く（63.8 %）、次いで養護教諭（31.0 %）、その他（3.5 %）の順であった。この結果は本調査の回答者の比率とほぼ重なるが、中学校では教頭や生徒指導主事等の学校全体のまとめ役が担当する比率が高いのに対して、高校では教育相談係や養護教諭等の比率が高く、ＳＣ担当が学校全体の中で分担化されている傾向が読みとれる。

##### ＳＣの受け入れ体制

ＳＣを受け入れるに当たって、中学校・高校ともに 8 割以上が行っていることは、「ＳＣ活動のルールについて教職員の共通理解を図る」「ＳＣをプリント等で保護者に紹介する」「カウンセリング専用の相談室を用意する」の 3 項目であった。それに対して、中学校と高校で行っている比率に大きな差があったのは、「ＳＣを全校集会等で生徒に紹介する」（中学校 93.2 %、高校 60.3 %）、「職員室にＳＣの机を用意する」（中学校 81.8 %、高校 24.1 %）、「相談室に直通電話を設置する」（中学校 65.9 %、高校 36.2 %）の 3 項目であった。この結果からは、高校に比べて中学校の方がＳＣの受け入れ体制が整っているといえるが、中学校と高校ではＳＣの勤務時間に大きな差があり（中学校は 1 日 8 時間・週 1 回、高校は 1 日 6 時間・月 1 回または 2 回）、そのことが影響しているのではないかと考えられる。

その他、「ＳＣと教職員の顔合わせの時間を確保する」が中学校・高校ともに約６割にとどまっていることや、カウンセリング専用の相談室を用意していない高校が約２割あること等は、今後の課題といえる。

#### ＳＣ来校日の知らせ方

ＳＣ来校日の生徒への知らせ方は、「掲示板や便りで知らせる」が中学校・高校ともに約９割あるのに対して、「各クラスごとに学級担任が知らせる」では中学校と高校でその比率に大きな違いがあった（中学校 20.5％，高校 53.4％）。その理由としては、ＳＣ来校の回数が少ない高校でＳＣ来校日を周知徹底するためには、学級担任がその都度生徒に知らせることが必要になるからではないかと推測される。

#### 授業中の面談の取扱い

授業中の面談の取扱いは、中学校では「原則として授業中の面談は認めていない」が最も多く（65.9％）、高校では「公認扱いにして面談を認めている」が最も多かった（82.8％）。授業中の面談を認めるかどうかは、学校や生徒の実態によって異なるが、中学校に比べてＳＣの勤務時間が短い高校では、面談時間を確保するために授業中の面談が必要になると推測できる。一方、授業中の面談を認めていない中学校では、授業の時間帯にＳＣをどのように活用するか、その工夫が求められるといえる。

#### 面談後の情報交換

面談後の情報交換は、中学校では「ＳＣ，ＳＣ担当者及び相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」が最も多く（50.0％）、次いで「ＳＣと相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」（34.1％）、「ＳＣとＳＣ担当者が情報交換を行う」（9.1％）の順であった。高校では「ＳＣ，ＳＣ担当者及び相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」が最も多く（75.9％）、次いで「ＳＣとＳＣ担当者が情報交換を行う」（20.7％）、「ＳＣと相談ケースに関係する教員が情報交換を行う」（1.7％）の順であった。この結果をみると、中学校に比べて高校では、面談後の情報交換にＳＣ担当者がかかわっている比率が極めて高く（中学校 59.1％，高校 96.6％）、ＳＣの窓口として機能している様子が見られる。

#### ＳＣと教職員の連絡会

ＳＣと教職員の連絡会は、中学校では「年４回以上」が最も多く（34.1％）、高校では「年１回」が最も多かった（24.1％）。学校全体での連絡会は、ＳＣ活動に対する教職員の認識を深める意味でも大切だが、その頻度はＳＣ来校の回数にも左右されると考えられる。しかし、中学校・高校ともに「特に何もしていない」の比率も高く（中学校 25.0％，高校 32.8％）、今後の課題といえる。

#### 面談で知り得た情報の管理／共有の形態

ＳＣの面談で知り得た情報を管理／共有する形態として、中学校では「ＳＣ・ＳＣ担当者・相談ケースに関係する教員・教頭・校長」が最も多く（29.5％）、高校では「ＳＣ・ＳＣ担当者・相談ケースに関係する教員」が最も多かった（50.0％）。その他、形態は様々であるが、いずれも面談についての情報管理を「集団守秘義務」としてとらえていることが分かる。しかし、その一方で、ＳＣのみが情報を管理する「個人内守秘義務」の形態もなくなってはならず（中学校 13.6％）、面談で知り得た情報をＳＣと教員の間でどのように共有するか、学校内の十分な協議が必要であるといえる。

### (3) SCの仕事内容

SCの仕事内容として、「生徒との面談」「教職員との情報交換」「保護者との面談」はほとんどの中学校・高校で行われており、次いで「教職員対象の研修会」(中学校 61.4 % , 高校 55.2 % ) , 「広報活動」(中学校 56.8 % , 高校 50.0 % ) の順であった。SCの専門性を生かした仕事内容と考えられる「専門機関との連絡・調整」(中学校 31.8 % , 高校 25.9 % ) , 「事例検討会等での助言」(中学校 25.0 % , 高校 22.4 % ) , 「心理アセスメント」(中学校 13.6 % , 高校 17.2 % ) 等は、いずれも低い比率にとどまった。

SCに期待する仕事内容としては、中学校・高校ともに「生徒との面談」「教職員との情報交換」「保護者との面談」が上位を占め、実際にSC活動として行っている仕事内容を今後も継続して期待していることが分かった。また、「教職員対象の研修会」(中学校 75.0 % , 高校 81.0 % ) , 「専門機関との連絡・調整」(中学校 59.1 % , 高校 56.9 % ) , 「事例検討会等での助言」(中学校 54.5 % , 高校 56.9 % ) 等は、実際に行っている比率よりも期待する比率の方が高く、専門性を生かしたSC活動に期待を寄せる様子が見られる。

### (4) SCの勤務時間

現在のSCの勤務時間は、原則として中学校が1日8時間・週1回、高校が1日6時間・月1回または2回となっている。この勤務時間について多いと考えている学校はなく、中学校では「ちょうどよい」45.5 % , 「少ない」54.5 % , 高校では「ちょうどよい」31.0 % , 「少ない」69.0 % であった。現在の勤務時間を考えると、中学校より高校で「少ない」と考える比率が高いのは当然の結果であるが、中学校でも、現在の週8時間を十分とは考えていないことが分かる。

SCの勤務時間を増やしたい理由は、中学校・高校ともに「生徒との面談の時間の確保」(中学校 91.7 % , 高校 95.0 % ) , 「教職員との情報交換の時間確保」(中学校 70.8 % , 高校 77.5 % ) , 「保護者との面談の時間の確保」(中学校 66.7 % , 高校 72.5 % ) の順であった。実際にSC活動として行っていることを、さらに充実させたいと考えている様子が見られる。

希望するSCの勤務時間は、中学校では「週2回」(79.2 % ) が最も多く、次いで「週3回」(16.7 % ) であった。高校では「週1回」が最も多く(60.0 % ) , 次いで「週2回」「週4回以上」(ともに 12.5 % ) であった。中学校では、少なくとも現在の勤務時間が倍になることを望み、高校では、現在の中学校と同じ「週1回」以上は確保したいと望んでいることが分かる。

## 3.4.3 SC配置校の意識について

### (1) 各質問項目に対する回答

回答中央値が4と5を示した質問項目(7項目)は、いずれもSCやSC活動に対して否定的な意味をもつ内容であった(「SCの考え方ややり方に戸惑うことがある」「教師にはカウンセリングに対する抵抗感がある」「SCと教師の考えが一致せず生徒によく影響が出る」「教師には生徒が面談を受けることを快く思わない雰囲気がある」「生徒が面談を受けると担任としての力量が問われる不安がある」「SCに生徒のことを相談するのは不安である」「SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる」)。この結果からは、教師の抱きやすい抵抗感や不安感が意外に低く、SCやSC活動に対するSC配置校の姿

勢は、全体的にポジティブであることが分かる。

回答中央値が1と2を示した質問項目(21項目)のうち、肯定的な意味をもつ質問項目(18項目)をみると、SCの専門的貢献(「専門家だという安心感がある」「教師とは異なった専門的な見方を知ることができる」「専門機関と連携しやすくなる」)、教師との連携(「SCと教職員との協力関係はうまくいっている」「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」「SCは教職員の中にとけこんでいる」「面談で知り得た情報の管理/共有の方法は適切である」)、教師援助(「教師の生徒理解が深まる」「教師の生徒指導の負担が軽くなる」「教師のメンタルケアに役立つ」)、生徒・保護者援助(「SCによって救われる生徒がいる」「生徒の心理面の援助になる」「保護者の心理面の援助になる」「成績評価とは関係がないので生徒や保護者は気軽に相談できる」「生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」)、SCの認知状態(「SCの役割や機能は教職員によく周知されている」「SCの役割や機能は生徒によく周知されている」)にかかわる内容であった。これらの分野におけるSC配置校の評価は、おおむね良好であることが分かる。

回答中央値が2を示した質問項目(19項目)のうち、否定的な意味をもつ質問項目(3項目)をみると、いずれもSC活用上の時間的制約に関する内容であった(「学校にはSCと十分な情報交換を行う時間的余裕がない」「SCの来校日が少ないので十分な情報交換ができない」「学校には研修会や事例検討会等を行う時間的余裕がない」)。学校の時間的余裕のなさやSCの勤務時間の少なさに対するSC配置校の不満が表れているといえる。

## (2) 群特性による比較

### 回答者群による比較

KruskalWallis 検定の結果、回答者群による比較では、「生徒の心理面の援助になる」「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」「教師のメンタルケアに役立つ」「専門家だという安心感がある」の5項目で有意差が認められた。

平均回答値及び平均ランクをみると、「生徒の心理面の援助になる」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」「教師のメンタルケアに役立つ」「専門家だという安心感がある」の4項目では、養護教諭群、教育相談係群、生徒指導主事群、教頭・教務主任群の順で、高い評価を得ているといえる。特に、「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」「専門家だという安心感がある」では各群の差は大きく、直接生徒や保護者と接する機会の多い養護教諭や教育相談係の評価が高いことが分かる。

また、「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」では、教育相談係群、養護教諭群、教頭・教務主任群、生徒指導主事群の順で、不満を感じている程度が大きいという結果であった。特に、教育相談係群と生徒指導主事群の差は大きいですが、教育相談係群が高校に多く(中学校 19.6%、高校 80.4%)、生徒指導主事群が中学校に多い(中学校 96.0%、高校 4.0%)ことから、SCの勤務時間の少なさに対する不満程度の違いが背景にあるのではないかと推測できる。

### 中学校群と高校群の比較

Mann-Whitney U 検定の結果、中学校群と高校群の比較では、「SCは教職員の中にとけ

こんでいる」「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」「生徒の心理面の援助になる」「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」「教師のメンタルヘルスに役立つ」「SCの来校日が少ないので十分な情報交換ができない」の6項目で有意差が認められた。

平均回答値及び平均ランクをみると、「SCは教職員の中にとけこんでいる」では、高校群より中学校群が優位であった。SCの勤務時間が、中学校では1日8時間・週1回、高校では1日6時間・月1回または2回であることから、SCと教職員が接する機会が多いほど評価が高いのではないかと推測できる。

「生徒の心理面の援助になる」「教師のメンタルケアに役立つ」「SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている」の3項目では、中学校群より高校群が優位であった。生徒や教師の心理面に対するSCの貢献度は、中学校より高校で高く評価されていることが分かる。また、SCと養護教諭の関係性に対する評価の差は、中学校より高校で養護教諭がSC担当者になる比率が高い(中学校4.5%、高校31.0%)ことと関連するのではないかと考えられる。

「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」「SCの来校日が少ないので十分な情報交換ができない」の2項目では、中学校群より高校群が優位であった。これは、SCの勤務時間の少なさに対する不満程度の違いがそのまま反映した結果といえる。

#### 男性SC配置校と女性SC配置校の比較

Mann-Whitney U検定の結果、男性SC配置校と女性SC配置校の比較では、「SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる」「生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」の4項目で有意差が認められた。

平均回答値及び平均ランクをみると、「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」「SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる」では、女性SC配置校より男性SC配置校が優位であった。研修機会に対する評価では男性SCが健闘しているといえる。また、SCと生徒の生活態度や規律との関連では、男性SCの対応に配置校が不満を示しているわけではないが(回答平均値4.28、平均ランク41.64)、カウンセリング活動においては、必ずしも男性SCが父性的に、女性SCが母性的に対応しているとは限らないことが分かる。

「生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある」「生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない」では、男性SC配置校より女性SC配置校が優位であった。生徒や保護者に与える安心感は、男性SCより女性SCの方が大きいといえる。

#### SCの年齢層による比較

Spearman 相関係数を求めた結果、SCの年齢層による比較では、「SCの来校日数が少ないので十分な情報交換ができない」の1項目で有意な正の相関が認められた。

SCとの情報交換不足に対する不満は、SCの年齢層が低いほど大きいことが分かるが、この結果からは、年齢層が高いSCほど、少ない来校日数の中でも教職員との情報交換に対し何らかの努力や工夫をしているのではないかと推測される。

#### SC経験年数による比較

Spearman 相関係数を求めた結果、SC経験年数による比較では、いずれも有意な相関は認められなかった。SC活動に対する認識や評価には、SC経験年数による差はないといえる。

### ＳＣの資格による比較

Mann-Whitney U 検定の結果，ＳＣの資格による比較では，「ＳＣは教職員の中にとけこんでいる」「生徒の心理面での援助になる」の２項目で有意差が認められた。

平均回答値及び平均ランクをみると，「ＳＣは教職員の中にとけこんでいる」では「臨床心理士」有資格群が優位であったが，「生徒の心理面での援助になる」では「臨床心理士」無資格群が優位であった。ＳＣの専門性が問われる生徒の心理面での援助において，有資格群より無資格群が高い評価を得ていることは気になるところだが，その他の項目では有意差が認められなかったことを考えると，ＳＣ活動に対する認識や評価には，「臨床心理士」の資格の有無による差はあまりないといえる。

### ＳＣの職歴による比較

Mann-Whitney U 検定の結果，ＳＣの職歴による比較では，「ＳＣによって救われる生徒がいる」「保護者の心理面の援助になる」「面談で知り得た情報の管理／共有の方法は適切である」「研修の機会が増え役立つ話が聞ける」「教師のカウンセリングの資質が向上する」の５項目で有意差が認められた。

平均値及び平均ランクをみると，いずれも無職歴群より有職歴群が優位であった。これらの項目は，ＳＣの生徒・保護者援助，教師との連携や教師援助にかかわる内容で，ＳＣの専門性が反映する分野といえる。ＳＣ以外の相談機関や病院等での勤務経験がＳＣの力量を高めているのではないかと考えられる。

### ＳＣ配置の経過年数による比較

Spearman 相関係数を求めた結果，ＳＣ配置の経過年数による比較では，「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」「専門家だという安心感がある」「生徒の心理面の援助になる」「ＳＣによって救われる生徒がいる」「保護者の心理面の援助になる」「ＳＣと養護教諭との協力関係はうまくいっている」「面談で知り得た情報の管理／共有の方法は適切である」「教師の生徒指導の負担が軽くなる」「教師のメンタルケアに役立つ」の９項目で有意な負の相関が認められた。

ＳＣ配置校の経過年数が長くなるほど，「予約が一杯で面談時間を確保しにくい」という不満が大きくなるのは，経過年数とともに予約が増え，十分にＳＣが活用されていることを意味するもので，ポジティブな評価と受けとめることができる。また，その他の８項目は，ＳＣの専門的貢献，生徒・保護者援助，教師との連携や教師援助にかかわる内容であるが，ＳＣ配置校の経過年数が長くなるほど，これらの分野におけるＳＣ活動に対する認識や評価が高まるといえる。

## 3.4.4 ＳＣ配置校の成功事例及び要望・意見等について

### (1) ＳＣ活動で評価できること

#### 専門的貢献

専門的な立場からの意見や専門機関との連携等，ＳＣの専門性を生かした貢献を評価している設置校が多かった。また，面談による援助とともに，専門的な技法を生かしたアプローチやＳＣ便りによる啓発等に対する評価もあった。設置校は，ＳＣの専門性が様々な形で生かされることを望んでいるといえる。

### ＳＣの適応状態

数は多くはなかったが、教師への気軽な声掛けや休み時間を利用した生徒との会話等、相談室での面談だけでなく、相談室の外に出て、教師や生徒との関係づくりを積極的に図ろうとするＳＣの姿勢を評価する声もあった。

#### 教師への援助

教師の精神的負担の軽減や生徒指導上の諸問題への助言等、背後からの教師援助を評価している。その他の教師援助としては、教師対象の研修会の実施やＬＨＲ等でのＴＴ活動等を挙げている設置校もあった。

#### 生徒や保護者への援助

様々な問題に悩む生徒や保護者への心理面の援助を評価している。特に、生徒や保護者に時間をかけてかかわってくれるＳＣを歓迎している様子が見える。また、ＳＣとの面談が、生徒の自己理解を深めたり、保護者が自らの養育態度や方法を振り返る機会となっていること等を評価する設置校もあった。

#### 学校組織への援助

学校の外側からＳＣが入ることによって、開かれた学校づくりの雰囲気が生まれたり、生徒指導上の諸問題を教師個人が抱え込むことが少なくなって、組織的対応がしやすくなったと評価する設置校もあった。これは、学校の外側にいるＳＣが学校システムの中で活動する意義を裏付けるものといえる。

### (2) ＳＣ活動における問題・課題

#### ＳＣの勤務時間

ＳＣの勤務時間が少ないことで、十分な情報交換の時間や面談時間がとれないことを問題・課題と考える設置校が最も多かった。また、勤務日の間隔が空くので継続した援助が難しいことや、ＳＣの専門性を生かした研修会や事例検討会の時間がとれないこと等、ＳＣの勤務時間の少なさは、様々な問題・課題につながる事が分かる。

#### ＳＣ活用の校内体制

教育相談環境が未整備であること、特にＳＣ活動に対する教師の共通理解やＳＣ活用の方法が確立していないこと等、校内体制のソフト面が整っていないと考える設置校が多かった。この背景には、ＳＣ活動に抵抗感や不安感を示す教師がいたり、ＳＣと教師の方針が一致しない等、ＳＣと教師の連携の問題・課題が横たわっていると考えられる。

#### その他

その他としては、ＳＣの基礎的特性や人間性にかかわること、生徒や保護者に対するＳＣ活動の認知がまだ十分ではないこと、ＳＣ活用上の範囲や時間的制約等、様々な問題・課題が指摘された。

### (3) ＳＣ活動によって成功した指導事例

#### 専門的貢献

生徒が抱える問題には、うつ病や強迫神経症等のように、教師では対応が難しいケースが少なくない。そのような専門的治療を要するケースをＳＣが適切に判断して、医療機関や専門機関にリファーした成功事例が多数あった。これは、ＳＣの専門性を生かした活動の典型的な例といえる。また、ＳＣの判定資料に基づく適切な就学指導によって、特殊学級が新設された事例等もあった。

#### 生徒や保護者への援助

ＳＣとの継続した面談によって、「情緒が安定した」「問題が整理できた」等の生徒援助の成功事例が多数あった。面談以外でも、専門的な技法を生かして、生徒のメンタル面にＳＣが予防的にかかわった部活動やＬＨＲの事例等も報告された。

また、保護者援助では、保護者本人を支えるかかわりの他に、生徒と保護者、教師と保護者の間にＳＣが入って調整役を果たした成功事例等もあった。

#### 不登校問題への対応

生徒指導上の諸問題の中で、特に不登校問題に関する成功事例が多数報告されたが、ＳＣとの継続した面談によって、保健室登校や別室登校の生徒が学級復帰を果たしたケースが最も多かった。その他、欠席がちな生徒や早退・遅刻の多い生徒の不登校を未然に防ぐことができた事例等も報告された。

#### (4) ＳＣ配置校の要望・意見

##### ＳＣの勤務時間

「ＳＣ活動における問題・課題」とも重なるが、ＳＣの勤務時間を増やしてほしいという要望が最も多かった。理由としては、問題・課題で挙げられたこと以外に、「ＳＣに対する教員間の意識のずれを解消したい」「ＳＣ活用の校内体制を整えたい」「ＳＣと教員がもっとかかわり合う時間を確保したい」等があった。特に高校では、月１回ではほとんど意味がないという厳しい意見もあった。

##### ＳＣの配置方法

当然のことではあるが、専門家として力量のあるＳＣの配置を求める声や、ＳＣの人事異動に学校の希望を取り入れてほしい等、ＳＣの適切な配置や人事異動を求める要望が多かった。今はＳＣの供給が需要に追いつかない状態なので、なかなか配置方法まで配慮できない現状だが、今後、このＳＣ事業の拡大とともに、教職員異動と同じような視点を取り入れたＳＣ配置が必要になるのではないかと考えられる。

##### 教育相談環境の整備

教育相談環境を整備するために、予算的な裏付けを求める要望もあった。相談室の改装や必要物品の購入等の他に、遠距離通勤や超過勤務状態にあるＳＣに対する給与面での配慮等が挙げられた。また、授業中の面談は各学校の裁量によるが、教育行政側からの後押しを求める声もあった。

##### ＳＣ連絡協議会のもち方

現在のＳＣ連絡協議会は、事務的な連絡やＳＣ・担当教師の情報交換の他に、研修的な意味合いももたせながら実施されているが、連絡調整や情報交換の時間をもっと増やしてほしいという意見が多かった。今後の課題としては、連絡調整や情報交換の充実を図るとともに、ＳＣ連絡協議会とは切り離して、研修体制の整備を図ることが必要ではないかと考えられる。

##### 研修会の開催

ＳＣの資質向上に向けた研修会とともに、ＳＣ担当教師を対象とした研修会を要望する声もあった。ＳＣ活用をより効果的に進めていくためには、ＳＣの資質のみならず、ＳＣ担当教師の理解や力量を高めるための研修企画に力を入れていくことも、今後の課題といえる。

## 4 SCを対象とした調査

### 4.1 目的

SCの年齢や経験、専門領域や教育背景は各自に異なり、勤務校における教育相談環境も各校で異なっていると推測される。今後のスクールカウンセリング事業の在り方を検討するに当たって、SCが学校現場でどのような意識をもちながら相談業務に従事しているかを知る必要がある。

本調査では、SCの基礎的特性を分析するとともに、現在の勤務状況や勤務校の教育相談環境をSCがどのように認識・評価しているかを解析する。また、SC側からの要望や提言について検討・整理する。

### 4.2 方法

対象者は宮城県内の中学校と高校に配置されたSC 57人（中学校 26人，高校 31人）であった。調査用紙（補助資料参照）を用いて、個々のSCに回答を求めた。調査用紙の内容は、年齢、性別、経験年数等の基礎的な特性に関するものと、1（＝とても当てはまる）から5（＝全く当てはまらない）までの5件法で回答する意識調査項目及び要望や提言に関する自由記述式回答による質問項目で構成した。調査は平成14年9月から10月にかけて行い、調査用紙は勤務校を経由して回収した。回収率は100%であった。

### 4.3 結果

#### 4.3.1 SCの基礎的特性調査

##### （1）性別と年齢構成

SCの性別構成は全体で22.8%が男性（中学23.1%，高校22.6%），77.2%が女性（中学76.9%，高校77.4%）であった。中学校・高校別の年齢構成は、図19のとおりである。

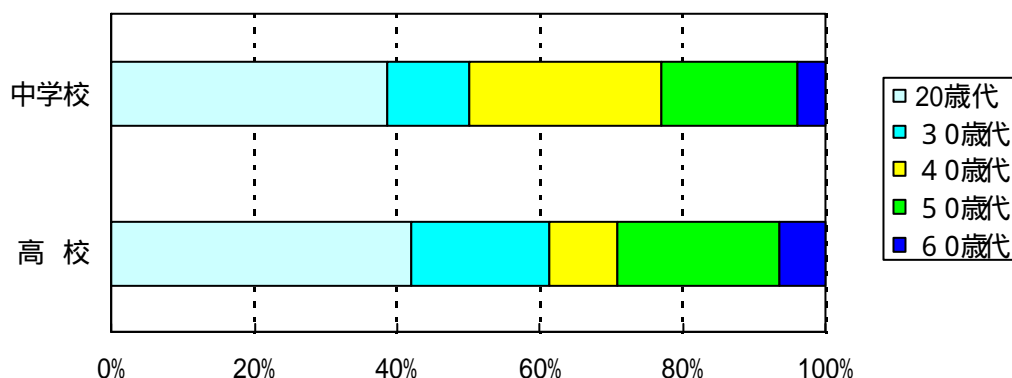


図19 SCの中学校・高校別の年齢構成

##### （2）心理臨床経験の年数

SCの心理臨床経験年数は全体で、2年以下の者19.3%，3～5年の者26.3%，6～

9年の者 19.3 % , 10 ~ 14年の者 12.3 % , 15 ~ 19年の者 8.8 % , 20年以上の者 14.0 % であつた。中学校・高校別の経験年数構成は、図20のとおりである。

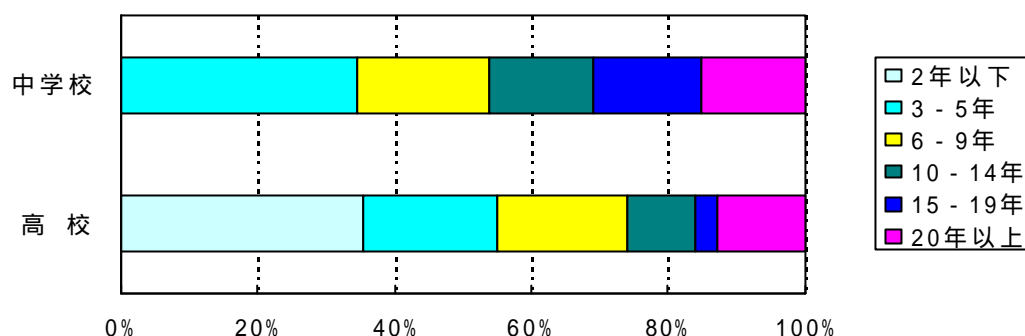


図20 S C の中学校・高校別の心理臨床経験年数の構成

(3) S C の経験年数

S C の経験年数は全体で、1年以下の者 17.5 % , 2 ~ 3年の者 43.9 % , 4 ~ 5年の者 17.5 % , 6 ~ 7年の者 15.8 % , 8 ~ 9年の者 1.8 % , 10年以上の者 3.5 % であつた。中学校・高校別のS C 経験年数の構成は、図21のとおりである。

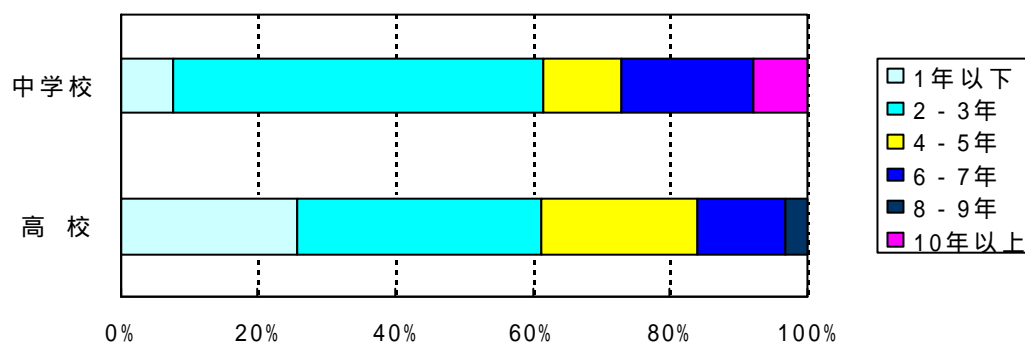


図21 中学校・高校別のS C 経験年数の構成

(4) S C の専門領域

S C が基盤としている専門領域の構成は、学校臨床領域 61.4 % , 病院臨床領域 21.1 % , 福祉領域 5.3 % , 産業領域 1.8 % , その他 10.5 % であつた。中学校・高校別の専門領域の構成は、図22のとおりである。

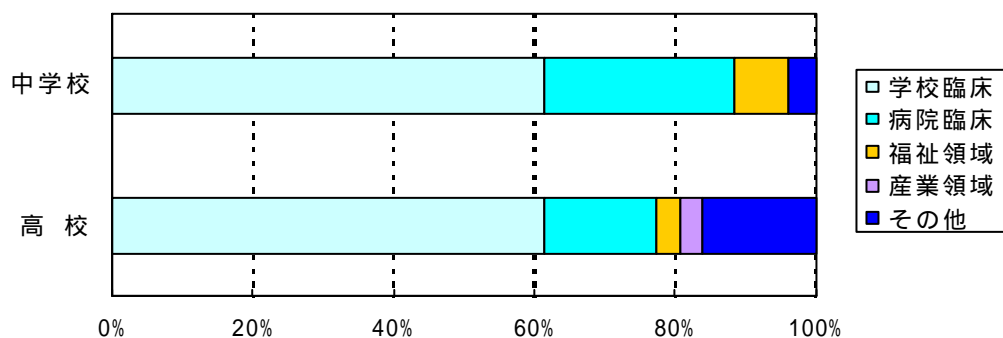


図22 中学校・高校別のS C の専門領域

(5) 担当校数とSC以外の仕事の有無

SCが担当している学校数は、1校 24.6% (中学 30.8%, 高校 19.4%), 2校 29.8% (中学 26.9%, 高校 32.3%), 3校 35.1% (中学 30.8%, 高校 38.7%), 4校 7.0% (中学 7.7%, 高校 6.5%), 5校以上 3.5% (中学 3.8%, 高校 3.2%)であった。

SCの他の仕事の有無(兼業の有無)については、常勤職として勤務する仕事をもつ者 12.3% (中学 15.4%, 高校 9.7%), 非常勤として勤務する仕事をもつ者 52.6% (中学 50.0%, 高校 54.8%), 他に仕事をもたない者 35.1% (中学 34.6%, 高校 35.5%)であった。

担当校数と兼業状況との関連性をみるために、クロス集計をしたところ、表1のとおりであった。独立性の検定(Fisherの直接法)<sup>4</sup>を行ったところ1%水準で有意であった。

表1 担当校数と兼業状況(人数)

担当校数	他に常勤職あり	他に非常勤職あり	兼業なし	(合計)
1校	4	8	2	14
2校	3	9	5	17
3校		13	7	20
4校			4	4
5校以上			2	2
合計	7	30	20	57

(6) スクールカウンセリングを学んだ状況

大学や大学院の授業でスクールカウンセリングについて学んだ機会があったかどうかについては、十分にあった 7.0%, ある程度あった 31.6%, あまりなかった 22.8%, 全くなかった 38.6%であった。中学校・高校別の学んだ機会の程度に関する構成は、図23のとおりである。

学んだ機会の程度(十分にあった～全くなかったの4段階)と年齢(20, 30, 40, 50, 60歳代の5段階)には有意な正の相関傾向が認められた(Spearman相関係数:  $r = .371$ ,  $p < .01$ )。

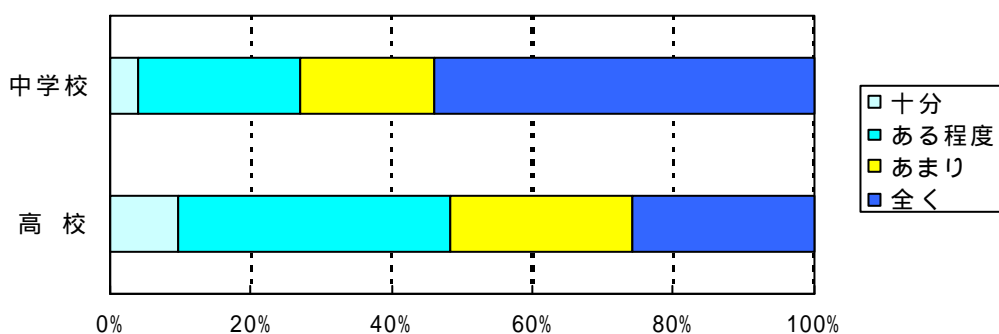


図23 スクールカウンセリングを学んだ機会の程度に関する中学校・高校別構成

<sup>4</sup> 独立性の検定とは、2つの要因が関連している(独立でない)か、関係がない(独立している)かを判定する統計分析の方法であり、Fisherの直接法はその方法の1つ。確率値  $p$  が  $< .01$  なら2つの要因が関係ない(独立している)確率は1%以下であり、確かに2つの要因が関連しているといえる。

(7) SCの資格取得状況

臨床心理士の資格の有無や取得の意思については、既に取得している 57.9 %，これから取得するつもり 28.1 %，取得は考えていない 14.0 %であった。中学校・高校別の資格取得に関する構成は，図24のとおりである。

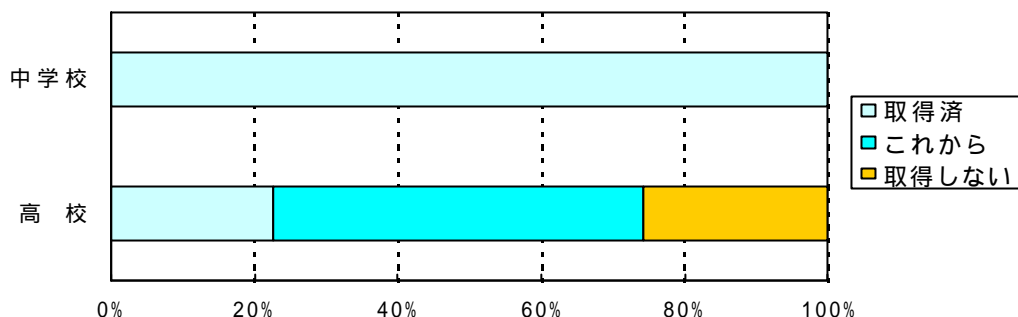


図24 資格取得に関する中学校・高校別構成  
(Note：中学校担当のSCはすべて資格取得者である)

SCの年齢と資格取得状況との関連性を見るためにクロス集計をしたところ，表2のとおりであった。独立性の検定（Fisherの直接法）を行ったところ1%水準で有意であった。

表2 SCの年齢と資格取得状況（人数）

年齢	取得済み	取得するつもり	取得は考えていない	(合計)
20歳代	11	12		23
30歳代	5	3	1	9
40歳代	8		2	10
50歳代	8		4	12
60歳代	1	1	1	3
合計	33	16	8	57

(8) 研修の必要性

スクールカウンセリングに関する研修の必要性については，とても必要 47.4 %，ある程度必要 49.1 %，あまり必要でない 3.5 %，全く必要でない0%であった。研修の必要性に関する中学校・高校別の構成は，図25のとおりである。

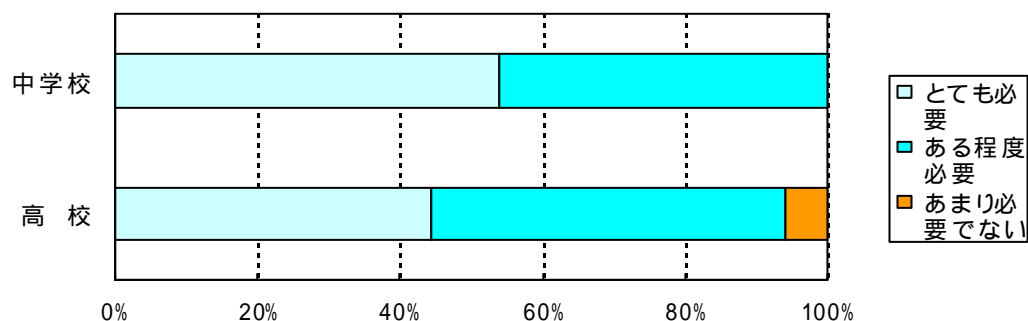


図25 研修の必要性に関する中学校・高校別の構成

#### 4.3.2 SCの意識調査

##### (1) 各質問項目に対する回答

SCの意識に関する55の質問項目に対する回答結果は「6.4 各調査項目の集計結果表(調査用紙2)」に掲載したとおりである。主要な質問項目の回答値(1~5)の中央値を挙げておく。

対応の自信に関する質問項目「教員への対応には自信がある」の回答中央値は3、「保護者への対応には自信がある」と「生徒への対応には自信がある」の各回答の中央値は2であった。

他者からの期待感に関する質問項目「自分は生徒から期待されていると感じる」「自分は保護者から期待されていると感じる」「自分は教員から期待されていると感じる」の各回答の中央値は3であった。

仕事への定着状態に関する質問項目「SCの仕事に慣れた」と「学校での自分の居場所ははっきりしている」の各回答の中央値は2であった。勤務の不満状態に関する質問項目「勤務校を変わりたい」「勤務回数や勤務時間がきつい」の各回答の中央値は4であった。

対応方針の検討に関する質問項目「専門家のスーパーバイザーがほしい」と「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」の各回答の中央値は2であった。

自分(SC)と教員との関係に関する質問項目「自分と教員との関係は良好である」「管理職(校長/教頭)との関係は良好である」の回答の中央値は2、「教員とのコミュニケーションには苦労しない」の回答の中央値は3であった。「職員会議や教員ミーティングに参加する機会がある」の回答の中央値は4であった。「教員は自分のクラスの問題を相談したがる」の回答の中央値は3であった。

相談システムの整備状態に関する質問項目「相談受付や予約方法はうまく機能している」「授業中の相談/来室について学校側は承認している」「相談担当の教員との連携はうまくいっている」の各回答の中央値は2であった。

相談利用状態に関する質問項目「生徒は相談室を気軽に訪れている」「自分(SC)の役割や存在は生徒に周知されている」「自分(SC)の役割や存在は教員に周知されている」の各回答の中央値は2であった。

教員に対する信頼感に関する質問項目「相談上の仕事を頼める教員とそうでない教員がいる」の回答の中央値は2であった。「生徒が相談に行くことを快く思わない雰囲気がある」の回答の中央値は4であった。

情報管理に関する質問項目「相談情報の管理はうまくいっている」「教員との相談情報の共有には不安がない」の各回答の中央値は2であった。

SCに対する学校側の理解に関する質問項目「管理職はSCの役割や機能を理解している」の回答の中央値は2、「教員はSCの役割や機能を理解している」の回答の中央値は3であった。

教員・生徒の精神状態に関する質問項目「教員間のコミュニケーションは良好である」「教員と生徒間のコミュニケーションは良好である」「生徒はいきいきと学校生活を送っている」「教員はいきいきと学校生活を送っている」の各回答の中央値は3であった。「生徒の学校でのストレスは大きいと感じる」の回答の中央値は2であった。

## (2) SCの基礎的特性による比較

### 男性群と女性群の比較

男性SC群(13人)と女性SC群(44人)の各質問項目の回答値を比較したところ、以下の3項目で有意差が認められた。

「教員への対応には自信がある」では、男性群の回答平均値は2.54(平均ランクは20.69)、女性群の回答平均値は3.14(平均ランクは31.45)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 178.000$ ,  $W = 269.000$ ,  $Z = -2.190$ ,  $p < .03$ )。

「不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信がある」では、男性群の回答平均値は2.15(平均ランクは16.42)、女性群の回答平均値は3.20(平均ランクは32.72)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 122.500$ ,  $W = 213.500$ ,  $Z = -3.250$ ,  $p < .01$ )。

「職員会議や教員ミーティングに参加する機会がある」では、男性群の回答平均値は2.83(平均ランクは20.42)、女性群の回答平均値は3.73(平均ランクは30.70)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 167.000$ ,  $W = 245.000$ ,  $Z = -2.010$ ,  $p < .05$ )。

### 中学担当群と高校担当群の比較

中学担当SC群(26人)と高校担当SC群(31人)の各質問項目の回答値を比較したところ、以下の8項目で有意差が認められた。

「教員は自分のクラスの問題を相談しながらない」では、中学担当群の回答平均値は2.81(平均ランクは23.25)、高校担当群の回答平均値は3.45(平均ランクは33.82)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 253.500$ ,  $W = 604.500$ ,  $Z = -2.542$ ,  $p < .02$ )。

「相談担当の教員との連携はうまくいっている」では、中学担当群の回答平均値は2.15(平均ランクは34.88)、高校担当群の回答平均値は1.58(平均ランクは24.06)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 250.000$ ,  $W = 746.000$ ,  $Z = -2.660$ ,  $p < .01$ )。

「生徒は相談室を気軽に訪れている」では、中学担当群の回答平均値は2.19(平均ランクは22.65)、高校担当群の回答平均値は2.97(平均ランクは33.57)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 238.000$ ,  $W = 589.000$ ,  $Z = -2.661$ ,  $p < .01$ )。

「授業中の相談/来室について学校側は承認している」では、中学担当群の回答平均値は2.58(平均ランクは33.81)、高校担当群の回答平均値は1.80(平均ランクは23.90)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 252.000$ ,  $W = 717.000$ ,  $Z = -2.388$ ,  $p < .02$ )。

「生徒はいきいきと学校生活を送っている」では、中学担当群の回答平均値は2.38(平均ランクは23.71)、高校担当群の回答平均値は2.87(平均ランクは32.65)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 265.500$ ,  $W = 616.500$ ,  $Z = -2.195$ ,  $p < .03$ )。

「自分は学校教育については素人だと思う」では、中学担当群の回答平均値は2.38(平均ランクは23.67)、高校担当群の回答平均値は3.03(平均ランクは33.47)であり、その差は有意であった(Mann - Whitney:  $U = 264.500$ ,  $W = 615.500$ ,  $Z = -2.296$ ,  $p < .03$ )。

「教員と生徒間のコミュニケーションは良好である」では、中学担当群の回答平均値は 2.38 (平均ランクは 23.38), 高校担当群の回答平均値は 2.90 (平均ランクは 32.93) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 257.000$ ,  $W = 608.000$ ,  $Z = - 2.396$ ,  $p < .02$ )。

「困ったときに相談できる人が校内にいる」では、中学担当群の回答平均値は 2.69 (平均ランクは 34.63), 高校担当群の回答平均値は 2.03 (平均ランクは 24.27) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 256.500$ ,  $W = 752.500$ ,  $Z = - 2.625$ ,  $p < .01$ )。

#### 基盤領域による比較

学校臨床を基盤とする S C 群 (35 人) と病院領域を基盤とする S C 群 (12 人) について, 各質問項目の回答値を比較したところ, 以下の 4 項目で有意差が認められた。

「不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信がある」では, 学校臨床群の回答平均値は 3.29 (平均ランクは 26.70), 病院臨床群の回答平均値は 2.50 (平均ランクは 16.13) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 115.500$ ,  $W = 193.500$ ,  $Z = - 2.415$ ,  $p < .02$ )。

「相談室の設置環境や備品等は整っている」では, 学校臨床群の回答平均値は 3.17 (平均ランクは 26.37), 病院臨床群の回答平均値は 2.33 (平均ランクは 17.08) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 127.000$ ,  $W = 205.000$ ,  $Z = - 2.087$ ,  $p < .04$ )。

「生徒は相談室を気軽に訪れている」では, 学校臨床群の回答平均値は 2.77 (平均ランクは 26.21), 病院臨床群の回答平均値は 2.08 (平均ランクは 17.54) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 132.500$ ,  $W = 210.500$ ,  $Z = - 2.005$ ,  $p < .05$ )。

「生徒の学校でのストレスは大きいと感じる」では, 学校臨床群の回答平均値は 2.11 (平均ランクは 21.60), 病院臨床群の回答平均値は 2.67 (平均ランクは 31.00) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 126.000$ ,  $W = 756.000$ ,  $Z = - 2.160$ ,  $p < .04$ )。

#### 資格取得を考えている群と考えていない群の比較

資格取得を考えている S C 群 (16 人) と考えていない S C 群 (8 人) について, 各質問項目の回答値を比較したところ, 以下の 3 項目で有意差が認められた。

「自分と教員との関係は良好である」では, 資格取得を考えている群の回答平均値は 2.63 (平均ランクは 14.56), 資格取得を考えていない群の回答平均値は 1.75 (平均ランクは 8.38) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 31.000$ ,  $W = 67.000$ ,  $Z = - 2.115$ ,  $p < .04$ )。

「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」では, 資格取得を考えている群の回答平均値は 1.31 (平均ランクは 9.47), 資格取得を考えていない群の回答平均値は 2.75 (平均ランクは 18.56) であり, その差は有意であった (Mann - Whitney:  $U = 15.500$ ,  $W = 151.500$ ,  $Z = - .698$ ,  $p < .001$ )。

#### 年齢と回答傾向との関係

年齢 (20・30・40・50・60 歳代の 5 段階) と各質問項目の回答値の Spearman 相関係数を分析したところ, 以下の 8 項目で有意な相関が認められた。

「SCの仕事に慣れた」( $r = -.280, p < .04$ ), 「自分と教員との関係は良好である」( $r = -.377, p < .01$ ), 「教員とのコミュニケーションには苦勞しない」( $r = -.350, p < .01$ ), 「学校での自分の役割ははっきりしている」( $r = -.314, p < .02$ ), 「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」( $r = .611, p < .001$ ), 「教員との相談情報の共有には不安がない」( $r = -.272, p < .05$ ), 「現在の勤務待遇に満足している」( $r = -.271, p < .05$ ), 「教員への対応には自信がある」( $r = -.306, p < .03$ ).

#### 心理臨床経験年数と回答傾向との関係

心理臨床経験年数(2年以下・3～5年・6～9年・10～14年・15～19年・20年以上の6段階)と各質問項目の回答値のSpearman相関係数を分析したところ、以下の15項目で有意な相関が認められた。

「SCの仕事に慣れた」( $r = -.426, p < .001$ ), 「学校での自分の居場所ははっきりしている」( $r = -.272, p < .05$ ), 「管理職との関係は良好である」( $r = -.298, p < .03$ ), 「自分と教員との関係は良好である」( $r = -.417, p < .001$ ), 「教員とのコミュニケーションには苦勞しない」( $r = -.319, p < .02$ ), 「学校での自分の役割ははっきりしている」( $r = -.316, p < .02$ ), 「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」( $r = .449, p < .001$ ), 「自分は保護者から期待されていると感じる」( $r = -.277, p < .04$ ), 「自分は教員から期待されていると感じる」( $r = -.265, p < .05$ ), 「SCの仕事はやりがいがある」( $r = -.270, p < .05$ ), 「現在の勤務待遇に満足している」( $r = -.269, p < .05$ ), 「教員への対応には自信がある」( $r = -.306, p < .02$ ), 「不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信がある」( $r = -.287, p < .03$ ), 「生徒はいきいきと学校生活を送っている」( $r = -.331, p < .02$ ), 「自分(SC)の役割や存在は教員に周知されている」( $r = -.327, p < .02$ ), 「専門家のスーパーバイザーがほしい」( $r = -.319, p < .02$ ).

#### SC経験年数と回答傾向との関係

SCの経験年数(1年以下・2～3年・4～5年・6～7年・8～9年・10年以上の6段階)と各質問項目の回答値のSpearman相関係数を分析したところ、以下の9項目で有意な相関が認められた。

「SCの仕事に慣れた」( $r = -.450, p < .001$ ), 「学校での自分の居場所ははっきりしている」( $r = -.406, p < .01$ ), 「自分と教員との関係は良好である」( $r = -.261, p < .05$ ), 「教員とのコミュニケーションには苦勞しない」( $r = -.267, p < .05$ ), 「学校での自分の役割ははっきりしている」( $r = -.288, p < .03$ ), 「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」( $r = .284, p < .04$ ), 「自分は生徒から期待されていると感じる」( $r = -.267, p < .05$ ), 「生徒はいきいきと学校生活を送っている」( $r = -.318, p < .02$ ), 「児童相談所などの外部機関との連携はうまくいっている」( $r = -.269, p < .05$ ).

#### 担当校数と回答傾向との関係

担当校数と各質問項目の回答値のSpearman相関係数を分析したところ、以下の5項目で有意な相関が認められた。

「相談上の仕事を頼める教員とそうでない教員がいる」( $r = -.293, p < .03$ ), 「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」( $r = -.265, p < .05$ ), 「相談受付

や予約方法はうまく機能している」( $r = -.275, p < .04$ ), 「相談担当の教員との連携はうまくいっている」( $r = -.284, p < .04$ ), 「授業中の相談/来室について学校側は承認している」( $r = -.336, p < .02$ ).

#### スクールカウンセリング教育と回答傾向との関係

大学/大学院におけるスクールカウンセリング教育の程度(十分あった・ある程度あった・あまりなかった・全くなかったの4段階)と各質問項目の回答値のSpearman相関係数を分析したところ、以下の2項目で有意な相関が認められた。

「自分は生徒から期待されている」( $r = .343, p < .01$ ), 「SCは学校に必要なだと思う」( $r = .271, p < .05$ ).

#### 4.3.3 SCの要望と提言

スクールカウンセリング事業に関するSCの要望と提言について、自由記述によって挙げられたものは次のとおりであった。重複する内容は整理して記した。

##### (1) 外部機関との連携について

外部機関との協力関係が不確かで、不安がある。

連携可能な外部機関に関する情報が無い。

身近に利用できる医療機関が少ない。

心理検査や診察等で連携/依頼できる特定の機関があると助かる。

発達障害ケースなどの他機関紹介後のかかわりが難しい。

##### (2) スーパーバイザー制度について

困ったときに相談できるスーパーバイザーが必要である。

##### (3) 相談室の整備について

待合室など複数の部屋がないと相談上の対応が困難である。

直通電話が必要である。

窓を開放できないので空調設備が必要である。

##### (4) 教員向け研修会について

スクールカウンセリングに関する教員の基本的理解が不足している。

教員の心理的危機管理意識が希薄である。

管理職の理解度によって活動のしやすさが違う。管理職向けの研修会が必要である。

教員向けのスクールカウンセリング研修会を年間計画に組み込む必要がある。

教育委員会でスクールカウンセリングについて教員に啓発してほしい。

##### (5) 勤務時間・回数について

月1, 2回の勤務では十分な対応ができない。せめて週1回8時間は必要である。

勤務時間が少なく、教員との情報交換も困難である。

##### (6) 通勤条件について

遠距離通勤を要する学校があり、時間的に相談活動に支障がある。

##### (7) 保護者へのサポート

暴力を振るう親のサポートが困難であり、子供の保護施設が必要である。

##### (8) 相談時期

相談時期が遅れがちであり、教員はもっと早く相談してほしい。

#### (9) 教育相談体制

学校全体での援助体制の構築が必要であり、SC・相談担当教諭・養護教諭・担任教諭による校内のチームづくりを進めるべきである。

#### (10) その他

同一校においてSCと心の教室相談員が併任されている場合についての意見があった。これは仙台市立の学校にも勤務しているSCから寄せられた意見であり、宮城県のスクールカウンセリング事業体制を対象とした本研究から外れる事柄になるが、参考として報告する。

双方にやり方が異なるため、心の教室相談員と部屋の共有が困難である。学校内での役割の区分が曖昧である。心の教室相談員の質について不安がある。

### 4.4 考察

#### 4.4.1 SCの基礎的特性について

##### (1) 性別，年齢，経験年数等

本調査の対象者となったSCの7割以上が女性であった。心理臨床領域で活躍する心理カウンセラーに女性が多いことはわが国の一般的な特徴であり、この特徴は第3章の学校調査でも裏付けられている。年齢構成をみると、中学校・高校とも20歳・30歳代のSCが半数以上を占め、若い世代が多く任用されている。また、中学校担当のSCに比較して、高校担当のSCは心理臨床経験年数が2年以下の者及びSC経験年数が1年以下の者の割合が多い。これはハイスクール・カウンセラー事業が、先行する中学校のSC活用事業(文部科学省の補助事業)に遅れて開始されたことと、任用条件の違いから心理カウンセリングのビギナーが多く含まれることによると考えられる。

以上の結果から、本県のスクールカウンセリング事業の基盤は、心理臨床経験の浅い若い世代及び女性のSCによって支えられている部分が大いといえよう。特に、高校担当のSCにその傾向が強い。よって、習熟のための研修体制の整備と、カウンセリング活動における母性的・父性的対応のバランスが課題であると考えられる。

##### (2) 専門領域

約6割のSCが学校臨床を専門とする者であった。元来、心理臨床家の専門領域は医療、福祉、司法等様々である。SC活用事業が始まった当初(平成7年～)は、医療臨床や福祉(発達、障害等)臨床に携わっていた心理臨床家が学校現場に派遣されて仕事をすることが多かった。その後、スクールカウンセリング事業の継続・拡大に伴って、学校臨床を専門とする心理臨床家が育ってきた経緯がある。このことが本県のスクールカウンセリング事業の現状にも反映されているといえよう。今後も学校臨床を専門とするSCがさらに増加することが予想される。

このことはSCの専門性を高めることとして歓迎される反面、専門知識や経験の制約によって、スクールカウンセリング活動の幅を狭めてしまうことが懸念される。心理臨床家の知識や経験は広いほど有利であるから、学校臨床以外の他領域の知識や経験を身に付けるための研修体制の整備が必要である。特に医療や福祉領域の知識は不可欠であり、非行問題に対処するためには司法領域の知識も必要となる。学校臨床を行う上では学校教育

についての知識も不可欠である。これらは大学・大学院における心理臨床家の養成 / 教育課程の課題であると同時に、職場教育としてのフォローアップの課題でもある。

### (3) 担当校数と兼業の有無

兼業をもたないSCほど担当校数が多いことが確認された。専業SCが複数の学校を兼務している実態が分かる。他に常勤職や非常勤職をもつ者がSC専業の者より多いが、現在はわが国のSC事業の整備の過渡期であり、この比率は徐々に逆転していくと予想される。仙台市の実情をみると、SC事業を拡大して勤務日や勤務時間を増加させるに伴って、兼業をもつSCが勤務条件に対応できなくなる状況が生じている。このことは新人の専業SCと入れ替わる契機ともなっており、本県のSC事業の今後を検討する上で考慮すべき点である。

### (4) 教育・資格と研修

大学や大学院でスクールカウンセリングを学んだ機会の程度とSCの年齢との間には有意な正の相関が認められた。若い世代ほど大学や大学院でスクールカウンセリングに関する教育を受ける機会があり、世代が上がるほどスクールカウンセリングに関する教育は受けなかったということである。大学や大学院におけるスクールカウンセリングに関する心理臨床教育はわが国のスクールカウンセリング事業が開始された平成7年以降に整備されてきたことが背景として考えられる。

スクールカウンセリングはわが国の新しい心理臨床領域であり、大学や大学院でスクールカウンセリングを学ぶ機会を得なかったベテラン世代にとって、スクールカウンセリングを新たに学び直すことが課題となっている。既に習熟した心理臨床スタイルをもつベテラン世代が、それを生かしながら学校臨床に対応できるかどうか問われている。世代の違いを越えて、ほとんどのSCがスクールカウンセリングに関する研修を必要と考えていることが分かった。心理職能団体である宮城県臨床心理士会では自主的なSC研修会を立ち上げて定期的な研修活動を行っている。専門職として日々の研修活動は不可欠であり、それに応じた研修体制を整備することはスクールカウンセリング事業を推進する上で重要である。同時に、SCの任用・再任に当たって研修活動状況を考慮する視点も必要と考えられる。

SCに対する需要が供給を上回る状態が続いている。国の補助事業である中学校のSCの任用条件は臨床心理士の有資格者であるが、宮城県独自の事業であるハイスクール・カウンセラー事業には資格を有しない者が多数任用されている。年齢が上がるほど資格取得を考えていない者が多い傾向が確認されたが、今後、大学や大学院における心理養成課程から新たな人材が育ってくるに従って、今以上にSCの質が問われるようになると予想される。優れた人材を確保していくためにも、SCの教育・研修制度は採用(任用)制度と連動する形で整備していく必要があると考える。

## 4.4.2 SCの意識について

### (1) 対応の自信

対応の自信に関する質問項目について、生徒・保護者対応の回答の中央値は2であり、教員対応の回答の中央値は3であった。生徒・保護者対応についてはおおむね自信をもっていることが分かったが、教員対応については自信があるとも自信がないともいえない中

間的な状態であった。生徒・保護者対応は直接的なカウンセリング活動であり自己評価がしやすいが、教員対応はそれ以外の要素が多く、自己評価が困難で、対応の是非について判断しかねている状況が推測される。

男女群の比較から、女性SCに比較して男性SCの方が教員対応の自信があり、不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信があることが分かった。性的属性によって得手・不得手の意識差が認められたことから、学校管理者側は女性カウンセラーが不得手と感じているこれらの側面に配慮することが必要と考えられる。すなわち、教員との関係や暴力・非行問題に対するサポート体制を検討することが求められる。

基盤領域群の比較から、学校臨床を基盤とするSCに比較して、病院臨床を基盤とするSCの方が暴力や非行問題に対応できる自信があることが分かった。重度の困難事例を扱うことが多い病院臨床を基盤とするSC（兼業群）に比較して、学校臨床を基盤とするSCはスクールカウンセリング事業開始後に仕事を始めた世代が多く<sup>5</sup>、そうした経験の違いが問題対処の自信の差異に影響していると推測される。このことは年齢が高くなるほど教員対応の自信が増し、心理臨床経験年数が多くなるほど教員対応及び暴力・非行問題への対応に自信が増す傾向からも裏付けられよう。今後、学校臨床を基盤とする経験の浅いSCの習熟を促進するための研修体制の整備を検討することが求められる。

## （2）定着状態

定着状態に関する質問項目について、仕事への慣れや学校内での居場所の有無の回答の中央値は2、勤務の不満足感の回答の中央値は4であり、全体としてSCの仕事や職場への定着状態はおおむね良好であることが分かった。

年齢が高いほど、あるいは心理臨床経験年数が多いほどSCの仕事に慣れたと感じ、勤務待遇に満足している傾向が認められた。またSC経験年数が多いほど仕事に慣れたと感じ、学校内での居場所がはっきりする傾向も認められたので、ベテランになるほど仕事・職場への定着状態が良好であることが確認されたが、新人は仕事・職場への定着には苦勞している側面が推測される。

スクールカウンセリングは新しく生まれた職域であり、就労経験のない多くの若い世代が参入している状況にある。新人向けの一般的な職場教育が必要と考えられるが、非常勤として任用されるSCにはそうした職場研修の制度はないのが現状である。今後、学校環境におけるSCの職場適応を促進するためには、新人向けの基礎的な職場研修の導入の検討や、学校現場における新人サポートについて配慮することが必要と思われる。

## （3）相談システムの整備状態

相談システムの整備状態に関する各質問項目の回答の中央値はいずれも2であり、全体的にSCはおおむね良好と判断していることが分かった。中学校担当群に比較して高校担当のSCの方が相談担当教員との連携や授業中の相談への配慮が良好であると判断している傾向が認められた。学校臨床群に比較して病院臨床を基盤とするSCの方が相談室環境が整っていると判断しており、担当校数が多くなるほど相談システムの整備状態が全般的に良好と判断する傾向が認められた。

<sup>5</sup> 20歳代の学校臨床群は16人、病院臨床群は6人である。

授業中の相談については、中学校に比較して高校の方が自由度が高いようである。高校では授業参加を含めて生徒の自主性に任せる部分が大きく、心理相談に対する学校側の対応も生徒の意思を尊重する面が反映されていると推測される。高校のハイスクールカウンセラー事業は県の単独事業であり、多くの経験の浅いSCが配置されている状況であるが、相談システムの整備は進んでいると推測される。病院臨床側からみても、公的制度である学校臨床の心理相談環境は整備されてきている状況と考えられる。

現在は各校に相談システムの整備を任せており、状況は各々異なっていると推測される。SCが複数の担当校をもち、それぞれの状況を比較できることは、相談システムの改善に有益であると考えられる。このことは学校側にも当てはまることであり、互いに他校の相談システムの整備状況を知る機会と、相談システムの評価方法を工夫することが必要である。

#### (4) 相談利用状況

相談利用状況に関する各質問項目の回答の中央値はいずれも2であり、全体的にSCはおおむね良好と判断していることが分かった。

学校臨床を基盤とするSCに比較して、病院臨床を基盤とするSCの方が生徒が気軽に相談室を訪れていると感じている。重い症状のクライアントを扱う病院臨床から見れば、学校臨床では軽い内容の相談や来室が多いかもしれない。また、高校担当のSCに比較して、中学校担当のSCの方が生徒が気軽に相談室を訪れていると感じている。中学生よりも高校生の方が心の問題を深く受け止めて相談室を利用していることが推測される。

高校生の年齢ともなれば、相談は本格的な心理カウンセリングの様相を帯びることが多い。年齢が低くなるほど雑談的な来室や遊び半分と見えるような来室が多くなるが、それらも日常的な心の安定化やストレス軽減の効果をもち、より深刻な問題を抱えた時のSC利用のための準備の機会ともなる。問題が深刻化しないよう日頃から予防的な対応を心掛ける必要があり、「そんなことぐらいで相談室に行くな」と相談を制限するような対応はすべきではないだろう。

#### (5) 教員との関係

教員との関係性に関する質問項目について、教員や管理職（校長・教頭）との関係に関する回答の中央値は2であり、全体的にSCはおおむね良好と判断していることが分かった。

年齢が上がるほど教員とのコミュニケーションに苦勞しない傾向があった。心理臨床経験年数が多くなるほど教員や管理職との関係は良好でコミュニケーションにも苦勞しないと判断し、SC経験年数が多くなるほど教員との関係が良好でコミュニケーションに苦勞しないと判断する傾向があった。資格取得を考えているSCに比較して、資格取得を考えていないSCの方が教員との関係は良好と判断する傾向があったが、これも年齢的な要因が背景にあるためと考えられる。

これらの結果から、若い世代ほど人間関係面の苦勞が多いことが推測できる。SCを専業とする若い世代が増えてきている現在、他に職場経験がないまま学校内での人間関係に戸惑うSCが生じる状況が予想される。このことはSCのメンタルヘルスにも影響する可能性があり、(2)でも述べたようなサポート体制の検討が必要と思われる。

SCが職員会議や教員ミーティングに参加する機会はあまりないことが分かった。SCが非常勤であり、勤務日と会議等のスケジュールが合わないことが理由として考えられ

る。しかし、「職員会議や教員ミーティングに参加する機会がある」の回答値には有意な性差が認められ、男性カウンセラーに比べて女性カウンセラーの方が参加の機会がより少ないと回答している。SCと教員間の意見交換の場の確保はスクールカウンセリング事業の基盤であり、場や機会の確保が望まれる。

教員が自分のクラスの問題を相談したがるかどうかについての回答値は3であり、どちらともいえないとSCは判断していることが分かった。中学担当のSCに比較して、高校担当のSCの方がそれを否定する有意な違いが認められた。4.3.2の(2)で報告したとおり、相談担当教員との連携、授業中の相談来室の承認、困ったときに相談できる人の存在については、いずれも中学担当群に比較して高校担当群の方が良好と回答している。こうした環境特徴の違いが高校教員のより開放的な姿勢の背景にあると考えられる。

#### (6) SCに対する学校側の理解

SCの役割や機能に対する管理職の理解に関する質問項目の回答の中央値は2であり、教員の理解に関する質問項目の回答の中央値は3であった。SCは管理職の理解についてはおおむね良好と判断しているが、教員のそれは良いとも悪いともいえない中間的な状態であると判断していることが分かった。

SC活用事業は文部科学省の方針に沿ってトップダウン式に導入された新事業であり、その意味でスクールカウンセリングに対する学校現場への説明や理解が後手になってしまった経緯がある。そうした事情から、この事業に対する説明や理解は学校管理職レベルにとどまっている懸念があり、その説明や理解の内実もSCの心理臨床的役割や機能までを十分に尽くしたものになってはいないと考えられる。それでも特異な専門的役割を担う非常勤職として、SCと学校管理職とのつながりは他の教職員とのつながりよりは濃厚であろうと推測される。スクールカウンセリングは学校全体で担う事業であり、今後は管理職に加えて一般教職員の理解の促進を図る工夫が必要と考えられる。

#### (7) 教員に対する信頼感

「生徒が相談に行くことを快く思わない雰囲気がある」の質問項目の回答の中央値は4であり、おおむね相談活動が教員に受け入れられているとSCが感じていることが分かった。その一方で、「相談上の仕事を頼める教員とそうでない教員がいる」の回答の中央値は2であり、SCが共同可能な教員を見分けながら対応していることが推測される。

スクールカウンセリング活動は対人関係を基盤とする活動であり、相手との信頼関係がないと不可能である。スクールカウンセリングやSCを否定的にみたり、“敵視”したりする教員は少数になってきていると考えられるが、守秘に関する信頼性や、教員間の人間関係、不登校等の問題の理解の状態などで、働き掛けに配慮を要する場面は多々あると推測される。

SCと教員が共同して学校臨床の問題に対応するためには、双方の役割や機能に関する相互理解が不可欠である。それぞれが自分の正当性を主張して対立するのではなく、それぞれの役割や機能、アプローチの違いや有効性を理解することからスクールカウンセリング事業は始まると考えられる。わが国ではスクールカウンセリング事業を通して心理カウンセリングが根付いていくと予想されるが、現在はその過渡期に当たる。(6)でも述べたとおりスクールカウンセリングに関する教員研修を進めることが必要であり、同時に学校教育に関するSC研修も必要と考えられる。

#### (8) 相談情報の管理

相談情報の管理に関する質問項目の回答の中央値はいずれも2であり、おおむね情報管理は良好であるとSCは判断していることが分かった。また、年齢が上がるほど教員との相談情報の共有にはより不安がないと判断する傾向が認められた。

相談情報の管理は、心理臨床上の守秘の原則の姿勢と関連して、学校における生徒指導面に新たな配慮を要請することとなった。SC活用事業の初期にはSCと教員側との相談情報の管理意識の違いからに双方に戸惑いもあったが、現在は相談情報の適切な共有方法の検討がなされてきており、おおむね適切な情報管理がなされるようになってきていると推測される。SCの年齢が上がるほど教員との相談情報の共有に不安がなかったことは、(5)で確認したとおり、日頃の教員との関係性やコミュニケーション状態が相談情報の管理面にも影響していると考えられる。生徒・保護者・教員・SCの相互の信頼関係が相談情報の保護と有効活用を可能にするのであり、その基盤づくりがスクールカウンセリング活動の基本となる。

#### (9) 対応方針の検討

自分の相談活動がうまくいっているのかどうか、あるいは何らかの問題を抱えたときにそれにどう対処するか、などの対応方針の検討作業はSCが常日頃行っていることである。「専門家のスーパーバイザーがほしい」の質問項目の回答の中央値は2であり、SCが専門的なスーパービジョンを必要としていることが分かった。心理臨床経験年数が増すほどスーパーバイザーを欲する傾向が認められたが、これはベテランになるほどスーパーバイザーの役割や機能の重要性を理解していることを反映していると考えられる。SCのメンタル・サポートの上からもスーパーバイザー制度の充実が待たれる。

「学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う」の質問項目の回答の中央値は2であり、全般的にSCは学校に合わせてやり方を変更しようとする意識をもっていることが分かった。また、年齢が低いほど、あるいは心理臨床経験年数やSC経験年数が少ないほど自分のやり方を変える必要があると回答する傾向が認められた。さらに、資格取得を考えていない群よりもこれから資格を取得しようと考えている群の方に同様の回答傾向が認められた。以上の結果から、若く臨床経験の少ない世代ほど学校に合わせて自分のやり方を変えようと考えていることが分かる。

自分のやり方を変えることは臨床環境（学校環境）への適応上必要なことであり、そのことが現場の状況に応じた相談活動を可能にすると考えられる。その一方で、環境要因に翻弄されて腰の定まらない相談活動を行ってしまう危険性もある。この点からも、自分の方針や相談スタイルがまだ定まらない若い世代をサポートするスーパーバイザーが必要であると考えられる。

#### (10) 利用者からの期待感と充足感

全体的には、生徒・保護者・教員からの期待感については感じるとも感じないともいえない中間的な状況であることが分かった。しかし、心理臨床経験年数が多いほど教員・保護者から期待されていると感じ、SC経験年数が多いほど生徒から期待されていると感じる傾向が認められた。また大学や大学院でスクールカウンセリング教育を受けた者ほど生徒から期待されていると感じ、SCの必要性を感じている傾向が認められた。心理臨床経験や教育背景の違いがSCとしての充足感に反映されると考えられる。

ＳＣによる心理相談はまだ一部の利用者に限定されているのが現状であり，学校全体の期待感や手ごたえを判断できる段階ではないと思われる。その意味でスクールカウンセリング事業は助動的な段階にあり，利用者である生徒・保護者・教員らがもっとＳＣと交流する機会を増やす必要がある。そのためには，心理相談だけにＳＣの役割を限定することなく，予防的視点に立つ日常的なメンタルヘルス指導などの導入を工夫することが必要と考える。そのことがＳＣの利用促進につながると期待される。

#### (11) 教員と生徒の精神状態

「生徒の学校でのストレスは大きいと感じる」の回答の中央値は2であった。全般的にＳＣは生徒が大きな学校ストレスを負っていると判断していることが分かった。病院臨床を基盤とするＳＣよりも，学校臨床を基盤とするＳＣの方が生徒のストレスはより大きいと感じている。病院臨床を基盤とするＳＣは病態の重いクライアントと接する機会が多いため，そうした感じ方の違いが生じたのではないかと推測される。あるいは，(1)で述べたとおり，学校臨床を基盤とするＳＣには若い世代が多いため，新人として学校現場に勤務する立場から生徒に共感する部分があったかもしれない。

その他の教員や生徒の精神状態に関する各質問項目の回答の中央値はいずれも3であり，良好とも良好でないとも判断できない中間的状态であるとＳＣは判断していることが分かった。高校担当のＳＣに比較して中学校担当のＳＣの方が，生徒の精神状態や教員と生徒間のコミュニケーションは良好であると判断している。これらの結果は，日常の学校現場における生徒や教員に対するＳＣのアセスメント(見立て)と見なすことができよう。

ＳＣは教員や生徒の精神状態を必ずしも楽観視していない。高校における状態の良好さの度合いが相対的に低いが，このことは中学生と高校生の精神的な質の違いを反映している可能性が考えられる。(4)で述べたとおり，高校生になれば徐々に幼さの表出でもある外面的な活発さや気軽さが沈静化し，精神的な内省傾向が深まると考えられる。教員と生徒との関係も中学校の場合とは異なってくるだろう。一般に「いきいき」して「活発」であることは学校教育で重視されるが，心理臨床ではそれに限定されない視点も含まれてくる。スクールカウンセリング事業の評価作業において，心理臨床上のアセスメントと教育上のアセスメントとの基準の違いを整理しておくことが必要と考えられる。

#### 4.4.3 ＳＣの要望と提言について

外部機関との連携については，連携先の情報の少なさや，実際に利用可能な連携先が見当たらないことが指摘されている。このことには地域的な事情も関与していると考えられる。宮城県内では児童ケースに対応できる精神医療機関や，発達・心理診断やサポートが可能な相談・支援施設は少なく，近隣に連携先を見いだせる地域は限定される。ＳＣが個人的に連携先を開拓することは限界があるから，事業全体として全県的な視野に立って連携可能な支援施設や支援機関を特定し，事前に連携協議を行っておくなどの基盤整備が必要と考えられる。連携先の選定に当たっては公的機関や宮城県臨床心理士会などの協力を得ながら情報収集を行うことが望まれる。

スーパーバイザーに対する要請の強さについては意識調査でも確認したところであり，スーパーバイザー制度の早期の実現が望まれる。スーパービジョンは単なる助言や指導に止まらない臨床的支持であり，心理臨床の熟練者であるほどその役割や機能を理解し

ている。スーパーバイザー制度の整備と並行して、新人ＳＣや学校側に対するスーパーバイザーの利用方法についての研修も必要である。

相談室の整備に関する課題は、イレギュラーな来室者を含む多数のクライアントに対応するための相談環境をどのように確保していくかであろう。時間差による対処方法には限界があり、待合室や個別指導用の別室などの確保が検討課題となっている。このことは学校全体の相談システムの整備にも関連し、スクールカウンセリング事業の先進地である仙台市で問題となっている心の教室相談員とＳＣとの役割分担や連携形態についても、具体的な検討を行っておくことが必要である。

教員や学校管理職向けのスクールカウンセリング研修の必要性が提言された。教員や学校管理職の理解の度合いが直接的にスクールカウンセリング活動に影響するからであり、ＳＣにとっては切実な問題である。また、様々な事件や事故による学校臨床における危機管理の意識は全国的に高まりつつあり、スクールカウンセリングにおける重要なテーマになっている。スクールカウンセリングはＳＣだけで行うことは不可能であり、相談環境の基盤となる教員の理解と自覚が不可欠である。教員によって教育相談／スクールカウンセリングに対する関心の温度差があるから、その点を考慮しながら教員の研修制度にスクールカウンセリングに関するカリキュラムを組み入れる必要がある。今後は大学や大学院における現職教員向けの講座などの利用も検討すべきであろう。

勤務環境に関しては、遠隔地への通勤の問題が挙げられた。通勤事情によって相談時間や教員との打ち合わせの時間などに支障をきたす場合もあると思われる。宮城県ではＳＣ／臨床心理士の居住地が仙台市周辺に集中しているため地域による偏りが大きい。ＳＣ／臨床心理士の需要に供給（養成）が間に合わない状況が続いており、即効的な解決策が見だしにくい。当面、遠隔地通勤の事情に配慮した勤務条件を整備するなどの対策が望まれる。特に教員との打ち合わせはスクールカウンセリング活動で重要であり、勤務時間内でそうした時間が確保できるための調整が必要である。

勤務回数・時間が少ないとの指摘があった。ＳＣの配置体制がまだ十分とはいえない状況が続いているが、事業の拡大・充実に伴って徐々に勤務回数や勤務時間が増えていくと予想される。現在はその過渡期であり、勤務回数や勤務時間が増加した場合に、勤務可能なＳＣ／臨床心理士が確保できるかどうか新たな問題として生じることになる。大学や大学院で心理臨床の専門教育を受けない者がＳＣとして任用される事態も予想される。このことは成果を上げてきたわが国のスクールカウンセリングの質の低下を招くことになり、安易な人材任用は避けるべきである。人材任用に関する現実的な対応策として、心理・教育系の大学院で心理臨床の専門教育を受け、心理専門職を目指している者を任用するなどの方法が考えられる。現在、高校担当のＳＣにそうした人材が任用されているが、その場合には任用後の研修教育や、専門家のスーパーバイザーによるサポートが必要となる。現在、わが国では心理・教育系の大学院で専門教育を受けていることが心理専門職に就くためのスタンダードである時代を迎えており、ＳＣの任用に当たってもそのことを考慮すべきであろう。

教育相談体制について、学校全体での体制づくりが重要との提言があった。スクールカウンセリングはチームで取り組むことが重要であり、ＳＣと他の学校教職員全体による連携体制の整備がその基盤となる。そのことがＳＣを有効に活用するための前提ともなる。

問題の予防や早期対応，また対応困難な保護者へのサポートなどもＳＣと教職員との連携によって可能となる。ＳＣが配置されていない学校も多数残っており，学校現場では教育相談体制の整備について試行錯誤する時期がまだ続くと予想される。心の教室相談員とＳＣとの役割分担や連携協力の問題などは，事業の拡充・展開に伴ってこれから生じてくる課題であると予想される。仙台市ではＳＣの中学校全校配置を早期に実現しており，成果とともに多くの問題点も明らかになってきている。宮城県ではそうした先行モデルを参照しながら，ＳＣの有効活用について検討していく必要があると考える。

## 5 研究のまとめと今後の課題

### 5.1 研究のまとめ

今回の調査研究から明らかになったポイントをまとめると、以下のとおりである。

- (1) 年齢が若く心理臨床経験の浅いＳＣが多く、特に高校においてその傾向は顕著であった。これは、ＳＣの供給が需要に追いつかない状況にあることや、高校のＳＣ任用条件に臨床心理士資格が義務付けられていないこと等を反映したものと見えるが、今後、ＳＣ事業が拡大するに伴って、しばらくはこの傾向が続くものと考えられる。
- (2) 学校臨床を専門領域とするＳＣが約６割であったが、ＳＣ事業の拡大とともに、この比率はさらに高まることが予想される。またその一方で、学校臨床以外の他領域を専門とする者やＳＣ以外に常勤職や非常勤職をもつ者が、ＳＣ事業の拡大に対応していくことが難しくなり、徐々に専業ＳＣと入れ替わっていくことが予想される。
- (3) 配置校における教育相談環境は、職員室にＳＣの机を用意したり、相談室に直通電話を設置する等のハード面では、中学校の方が整っているといえるが、ＳＣと担当者の連携や授業中の面談の取扱い等のソフト面では、高校の方が整っていると評価するＳＣが多かった。
- (4) ＳＣの仕事内容は、「生徒との面談」「教職員との情報交換」「保護者との面談」等が中心であった。また配置校では、これらの仕事内容を今後も継続して期待するとともに、「教職員対象の研修会」「専門機関との連絡・調整」「事例検討会等での助言」等、さらに専門性を生かしたＳＣ活動に期待を寄せていることが分かった。
- (5) ＳＣの勤務時間について多いと考えている配置校はなく、勤務時間の少なさに対する配置校の不満は大きい様子が見られた。十分な情報交換の時間や面談時間の確保等を理由に、中学校では、少なくとも現在の勤務時間が倍になることを望み（週２回）、高校では、現在の中学校と同じ週１回以上は確保したいと望んでいることが分かった。
- (6) ＳＣ活動に対する配置校の意識は、全体的にポジティブであり、教師の抱きやすい抵抗感や不安感は低いという結果であった。また、ＳＣ配置の経過年数が長くなるほど、ＳＣの専門的貢献、生徒・保護者援助、教師との連携や教師援助等、ＳＣ活動に対する配置校の認識・評価は高まる傾向が見られた。
- (7) ＳＣの年齢、経験年数、資格の有無による比較では、配置校の認識・評価にあまり差は見られなかったが、職歴による比較では、生徒・保護者援助、教師との連携や教師援助等のＳＣの専門性が反映する分野で、無職歴群より有職歴群が高い評価を得ていることが分かった。
- (8) 生徒・保護者対応について、全体的にＳＣはおおむね自信をもっていることが分かったが、教師への対応や暴力・非行問題への対応については、ＳＣの性別、年齢、経験年数によって差が見られた。女性ＳＣより男性ＳＣの方が自信があり、年齢は高くなるほど、心理臨床経験やＳＣ経験は多くなるほど、ＳＣの自信が増す傾向にあることが分かった。
- (9) ＳＣの仕事や職場への定着状態は、配置校、ＳＣともに、おおむね良好と判断していることが分かった。また、ベテランになるほどＳＣの仕事に慣れたと感じ、勤務待遇に

満足している傾向が認められたが、逆に新人は、仕事や職場への定着に苦労している側面が推測される。

- (10) 教職員との関係について、全体的にＳＣはおおむね良好と判断しているが、ＳＣ活動に対する配置校の理解については、管理職の理解は評価しながらも、一般教師の理解はどちらともいえないと判断していることが分かった。ＳＣ活動を否定したり敵視したりする教師は少ないものの、ＳＣが共同可能な教師を見分けながら対応している様子がうかがわれた。
- (11) 相談情報の管理について、全体的にＳＣはおおむね良好と判断しており、配置校の実態調査でも、相談情報の管理を「集団守秘義務」としてとらえていることが分かった。また、ＳＣの年齢が高くなるほど、教師との相談情報の共有に不安が少なくなる傾向が認められ、日常的なＳＣと教師の関係性が情報管理の面にも影響していると考えられる。
- (12) 心理臨床経験が多くなるほど、ＳＣは専門的なスーパービジョンを欲する傾向があることや、若く臨床経験の少ない世代ほど、学校に合わせて自分のやり方を変えようと考えていることが分かった。いずれの場合でも、対応方針の検討作業において、熟練したスーパーバイザーが必要であると考えられる。
- (13) 専門的治療を要するケースをＳＣが適切に判断して、医療機関や専門機関にリファーした成功事例が多数報告されたが、ＳＣの要望・提言では、外部機関の情報が少ないことや、利用可能な外部機関が見当たらないこと等が指摘された。ＳＣが個人で連携先を開拓するには限界があり、教育行政側からの後押しが必要であると考えられる。

## 5.2 今後の課題

今回の調査研究から今後の課題として明らかになったことは、以下のとおりである。

- (1) ＳＣの勤務日や勤務時間を増やしていくことが今後の課題である。文部科学省の方針（平成 17 年度までにＳＣを全国のすべての公立中学校に配置）を受けて、宮城県内のＳＣ配置校は毎年確実に増えていくことが予想されるが、ＳＣの勤務日や勤務時間についてはまだ不透明な段階といえる。しかし、今回の調査研究から、ＳＣの勤務が少ないことは、十分な情報交換の時間や面談時間がとれない、勤務日の間隔が空くので継続した援助が難しい、ＳＣの専門性を生かした研修会や事例研究会の時間がとれない等、様々な問題につながる事が分かった。

今後のＳＣ事業は、配置校の拡大とともに、配置校の面談利用やＳＣ活用の状況を踏まえながら、ＳＣの勤務日や勤務時間を増やしていく方向性を視野に入れることが必要だといえる。

- (2) ＳＣ事業の拡大とともに懸念される問題が、スクールカウンセリングの質の低下である。既に考察してきたように、本県のＳＣ事業は、年齢が若く心理臨床経験の浅いＳＣによって支えられている現状にある。今後、しばらくはこの傾向が続くものと考えられるが、それと同時に、配置校から高い評価を得ている有職歴者群（学校臨床以外の他領域を専門とする者やＳＣ以外に常勤職や非常勤職をもつ者）が、拡大するＳＣ事業の勤務条件に対応できなくなり、新人ＳＣと入れ替わっていくことも予想される。

今後の課題としては、このような問題を見越して、ＳＣの資質向上に向けた研修体制

を整備したり，熟練した有職歴者群をスーパーバイザーとして任用する等の対策が必要だといえる。またそのためには，大学や大学院におけるＳＣ養成カリキュラムと連動させながら，宮城県臨床心理士会との連携で，早急に研修体制づくりを進めていくことが求められる。

- (3) ＳＣの資質向上に向けた研修のみならず，教師を対象とした研修企画に力を入れていくことも今後の課題である。ＳＣは，ＳＣの専門性を理解して実際にＳＣと一緒に教育相談活動を進めていける担当教師を求めている。また，ＳＣ活動を否定したり敵視したりする教師は少ないものの，教師によってＳＣ活動に対する関心に温度差があることは否定できない。

そういった現状を考慮しながら，ＳＣ担当教師の理解や力量を高めるための研修企画や，教職研修制度にスクールカウンセリングに関するカリキュラムを組み入れる等の工夫が必要であるといえる。

- (4) ＳＣがもっている知識や情報を有効に活用して，外部の専門機関との連携の窓口を広げていくことは，生徒が抱える問題が難しくなればなるほど，スクールカウンセリングの大切な働きとなる。しかし，年齢が若く心理臨床経験の浅いＳＣが多い現状を考えると，ＳＣが個人で連携可能な専門機関を開拓するには限界があるといえる。

今年度，宮城県教育研修センター教育相談班では，宮城県内 170 余りの各種相談機関を，その相談内容，相談対象，地域別等に応じて検索できる「みやぎ悩まネット！」を作成した。学校とＳＣが協力して連携可能な専門機関を開拓していく際の基礎資料として，この「みやぎ悩まネット！」を有効に活用していただければ幸いである。

#### 主な参考文献

- |                                       |      |
|---------------------------------------|------|
| ・兵庫県立教育研修所：「スクールカウンセラー さらなる活用に向けて 」   | 1999 |
| ・兵庫県立教育研修所：「スクールカウンセラー さらなる活用に向けて 」   | 2000 |
| ・兵庫県立教育研修所：「スクールカウンセラー さらなる活用に向けて 」   | 2001 |
| ・伊藤美奈子：「学校側から見たスクールカウンセラー活動の評価」臨床心理士報 | 2000 |
| ・文部科学省：「スクールカウンセラー活用調査研究委託研究集録」中等教育資料 | 2001 |

6 補助資料

6 . 1 調査用紙 1 ( S C 配置校用 )

## スクールカウンセラーの効果的な活用に向けての調査

この調査は、スクールカウンセラー配置校におけるスクールカウンセラー活用の実態を調査し、その効果的な活用に向けた課題と展望を明らかにしようとするものです。調査結果は統計的に処理し、個人的に迷惑をかけることはありませんので、ご協力よろしくをお願いいたします。

\* この調査にはどなたが回答されますか。下記のいずれかの番号に をつけてください。

校長	教頭	教務主任	生徒指導主事(部長)
教育相談係	養護教諭	その他( )	

### 【調査者】

宮城県教育研修センター教育相談班

宮城教育大学教育学部

主任指導主事 門脇 啓一

助教授 佐藤 静

指導主事 今野 理一郎

指導主事 鈴木 則男

指導主事 藤倉 眞一

指導主事 佐藤 敏文

指導主事 脇坂 晴久

指導主事 佐藤 芳枝

専門研修員 前田 正

専門研修員 後藤 秀樹

以下の質問について、該当する番号に をつけてください。なお、S Cとはスクールカウンセラーの略記です。

< S Cについて >

- a あなたの学校の S C は男性ですか、女性ですか。  
男性      女性
- b あなたの学校の S C はどの年齢層ですか。  
20 歳代      30 歳代      40 歳代      50 歳代      60 歳以上
- c あなたの学校の S C の S C 経験年数は何年ですか（他校での経験年数を含む）  
1 年以下      2 ～ 3 年      4 ～ 5 年      6 ～ 7 年      8 ～ 9 年      10 年以上
- d あなたの学校の S C はどのような資格がありますか（複数選択可）。  
臨床心理士      教員免許      特になし      その他（      ）
- e あなたの学校の S C は S C 以外にどのような職歴がありますか（複数選択可）  
教職経験（幼小中高特）      大学勤務      病院勤務      相談機関勤務（児童相談所等）  
特になし      その他（      ）

< 学校の対応について >

- f あなたの学校に S C が配置されて何年になりますか。  
1 年目      2 年目      3 年目      4 年目      5 年目      6 年以上
- g S C との連絡・調整はどなたが担当していますか。  
教頭      教務主任      生徒指導主事（部長）      教育相談係      養護教諭  
その他（      ）
- h あなたの学校では、S C を受け入れるにあたってどのようなことを行っていますか（複数選択可）。  
S C 活動のルールについて教職員の共通理解を図る（ex. 守秘義務の範囲、授業中の面談の取扱い）  
S C と教職員の顔合わせの時間を確保する。      S C を全校集会等で生徒に紹介する。  
S C をプリント等で保護者に紹介する。      カウンセリング専用の相談室を用意する。  
職員室に S C の机を用意する。      相談室に直通電話を設置する。  
その他（      ）
- i あなたの学校では、S C の来校日をどのように生徒に知らせていますか（複数選択可）  
各クラスごとに学級担任が知らせる      掲示板や便りで知らせる  
特に知らせる手だては講じていない      その他（      ）
- j 授業中の面談の取扱いはどうしていますか。  
公認扱いにして面談を認めている      授業を欠課扱いにして面談を認めている  
原則として授業中の面談は認めていない      その他（      ）
- k あなたの学校では、S C の面談が終わった後の情報交換をどのように行っていますか。  
S C と S C 担当者が情報交換を行う      S C と相談ケースに関する教員が情報交換を行う  
S C , S C 担当者及び相談ケースに関する教員が情報交換を行う  
特に情報交換はしていない      その他（      ）
- l あなたの学校では、S C と教職員の連絡会をどの程度の頻度で開催していますか。  
年 1 回      年 2 回      年 3 回      年 4 回以上      特に何もしていない
- m 面談で知り得た情報は基本的にだれが管理 / 共有していますか（複数選択可）  
S C      S C 担当者      相談ケースに関する教員      教頭      校長  
全教職員      その他（      ）

< S C の勤務内容について >

- n あなたの学校では、S Cはどのような仕事をしていますか（複数選択可）  
 生徒との面談 保護者との面談 心理アセスメント（検査・調査）  
 教職員との情報交換 事例検討会等での助言 保護者対象の研修会  
 教職員対象の研修会 広報活動（「S C 便り」の発行等）  
 授業等でのT T活動（人間関係スキルや心を育てる活動の補助）  
 専門機関（教育センター，児童相談所，病院等）との連絡・調整 その他（ ）
- o あなたの学校では、S Cにどのような仕事を期待しますか（複数選択可）  
 生徒との面談 保護者との面談 心理アセスメント（検査・調査）  
 教職員との情報交換 事例検討会等での助言 保護者対象の研修会  
 教職員対象の研修会 広報活動（「S C 便り」の発行等）  
 授業等でのT T活動（人間関係スキルや心を育てる活動の補助）  
 専門機関（教育センター，児童相談所，病院等）との連絡・調整 その他（ ）

< S C の勤務時間について >

- p 現在のS Cの勤務時間はどのくらいですか。  
 1日8時間・週1回 1日6時間・月2回 1日6時間・月1回 その他（ ）
- q 現在のS Cの勤務時間についてどのように考えますか。  
 多い ちょうどよい 少ない
- r 「少ない」と回答した学校はどんな理由でS Cの勤務時間を増やしたいと考えますか（複数選択可）  
 生徒との面談の時間の確保 保護者との面談の時間の確保  
 心理アセスメント（検査・調査）の実施 教職員との情報交換の時間確保  
 事例検討会等での助言の機会確保 保護者対象の研修会の実施  
 教職員対象の研修会の実施 広報活動（「S C 便り」の発行等）の実施  
 授業等でのT T活動（人間関係スキルや心を育てる活動の補助）の実施  
 専門機関（教育センター，児童相談所，病院等）との連絡・調整 その他（ ）
- s 「少ない」と回答した学校はどのくらいのS Cの勤務時間を希望しますか（1日8時間勤務として）  
 週1回 週2回 週3回 週4回以上 その他（ ）

あなたの学校のS C活動に関する以下の項目について，該当する番号に をつけてください。  
 番号の意味は次のとおりです。項目内容に応じてご回答ください。

とても当てはまる = 1	だいたい当てはまる = 2	どちらともいえない = 3
あまり当てはまらない = 4	全く当てはまらない = 5	

- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| ア S Cは教職員の中にとけこんでいる       | [ 1 2 3 4 5 ] |
| イ S Cと教職員との協力関係はうまくいっている  | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ウ S Cと養護教諭との協力関係はうまくいっている | [ 1 2 3 4 5 ] |
| エ S Cに生徒のことを相談するのは不安である   | [ 1 2 3 4 5 ] |
| オ S Cの考え方ややり方に戸惑うことがある    | [ 1 2 3 4 5 ] |

とても当てはまる = 1	だいたい当てはまる = 2	どちらともいえない = 3
あまり当てはまらない = 4	全く当てはまらない = 5	

カ	ＳＣの役割や機能は教職員によく周知されている	[ 1 2 3 4 5 ]
キ	ＳＣの役割や機能は生徒によく周知されている	[ 1 2 3 4 5 ]
ク	ＳＣの役割や機能は保護者によく周知されている	[ 1 2 3 4 5 ]
ケ	教師にはカウンセリングに対する抵抗感がある	[ 1 2 3 4 5 ]
コ	生徒や保護者にはカウンセリングに対する抵抗感がある	[ 1 2 3 4 5 ]
サ	生徒の心理面の援助になる	[ 1 2 3 4 5 ]
シ	保護者の心理面の援助になる	[ 1 2 3 4 5 ]
ス	教師の生徒指導の負担が軽くなる	[ 1 2 3 4 5 ]
セ	予約が一杯で面談時間を確保しにくい	[ 1 2 3 4 5 ]
ソ	ＳＣの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる	[ 1 2 3 4 5 ]
タ	成績評価とは関係がないので生徒や保護者は気楽に相談できる	[ 1 2 3 4 5 ]
チ	生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある	[ 1 2 3 4 5 ]
ツ	生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない	[ 1 2 3 4 5 ]
テ	ＳＣと教師の考えが一致せず生徒によくない影響が出る	[ 1 2 3 4 5 ]
ト	学校にはＳＣと十分な情報交換を行う時間的余裕がない	[ 1 2 3 4 5 ]
ナ	教師の生徒理解が深まる	[ 1 2 3 4 5 ]
ニ	教師のメンタルケアに役立つ	[ 1 2 3 4 5 ]
ヌ	教師とは異なった専門的な見方を知ることができる	[ 1 2 3 4 5 ]
ネ	ＳＣが不登校以外の暴力や非行問題に対応することは難しい	[ 1 2 3 4 5 ]
ノ	専門機関と連携がしやすくなる	[ 1 2 3 4 5 ]
ハ	ＳＣによって救われる生徒がいる	[ 1 2 3 4 5 ]
ヒ	専門家だという安心感がある	[ 1 2 3 4 5 ]
フ	面談で知り得た情報の管理 / 共有の方法は適切である	[ 1 2 3 4 5 ]
ヘ	教師には生徒が面談を受けることを快く思わない雰囲気がある	[ 1 2 3 4 5 ]
ホ	ＳＣの来校日数が少ないので十分な情報交換ができない	[ 1 2 3 4 5 ]
マ	研修の機会が増え役立つ話が聞ける	[ 1 2 3 4 5 ]
ミ	教師のカウンセリングの資質が向上する	[ 1 2 3 4 5 ]
ム	学校として職場のチームワークがよくなる	[ 1 2 3 4 5 ]
メ	学校には研修会や事例検討会等を行う時間的余裕がない	[ 1 2 3 4 5 ]
モ	生徒が面談を受けると担任としての力量が問われる不安がある	[ 1 2 3 4 5 ]

\* その他，ＳＣ活動で評価できることがあれば自由に記入してください。

--

\* その他，ＳＣ活動で問題・課題だと思ふことがあれば自由に記入してください。

--

あなたの学校でＳＣ活動によって成功した指導事例はありますか。その概要を教えてください。


どのようなことでも結構ですから，要望や意見等があれば自由に記入してください。


ご協力ありがとうございました。

6 . 2 調査用紙 2 ( S C 用 )

## スクールカウンセラー ( S C ) ・ アンケートのお願い

このアンケートは、今後のスクールカウンセリング事業をさらに充実させるために行うものです。調査は無記名で、結果はすべて統計的に処理します。お手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

以下の質問について、該当する番号に をつけてください。

a あなたの性別は？

男 女

b あなたの年齢は？

20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳以上

c あなたの心理臨床経験(スクールカウンセラーの経験を含む)年数は？

2年以下 3～5年 6～9年 10～14年 15～19年 20年以上

d あなたのスクールカウンセラーの経験年数は？

1年以下 2～3年 4～5年 6～7年 8～9年 10年以上

e あなたが基盤とする心理臨床領域は？

学校 医療 福祉 司法 産業 その他

f 現在スクールカウンセラーを何校担当していますか？

1校 2校 3校 4校 5校以上

g スクールカウンセラー以外に勤めているところがありますか？

常勤職として勤める仕事がある 他の非常勤職がある ない

h 大学学部 / 大学院の授業でスクールカウンセリングについて学ぶ機会がありましたか？

十分にあった ある程度あった あまりなかった 全くなかった

i スクールカウンセリングに関する研修は必要ですか？

とても必要 ある程度必要 あまり必要でない 全く必要でない

j 臨床心理士(認定協会資格)の資格は？

すでに取得している 取得するつもり 取得は考えていない

ご自身のスクールカウンセリング活動に関する以下の項目について、自分の考えや気持ちに該当する番号 に をつけてください。番号の意味は次のとおりです。項目内容に応じてご回答ください。

とても当てはまる = 1    だいたい当てはまる = 2    どちらともいえない = 3  
 あまり当てはまらない = 4    全く当てはまらない = 5

複数の学校を兼務している方で、勤務校によって状況が違うと思われる方は、どこか一つの学校を想定してご回答ください。

- |                              |               |
|------------------------------|---------------|
| ア スクールカウンセラーの仕事に慣れた。         | [ 1 2 3 4 5 ] |
| イ 学校での自分の居場所ははっきりしている。       | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ウ 自分は生徒に受け入れられていると思う。        | [ 1 2 3 4 5 ] |
| エ 管理職（校長／教頭）との関係は良好である。      | [ 1 2 3 4 5 ] |
| オ 自分と教員との関係は良好である。           | [ 1 2 3 4 5 ] |
| カ 教員のやり方や考え方にとまどうことがある。      | [ 1 2 3 4 5 ] |
| キ 教員とのコミュニケーションには苦勞しない。      | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ク 教員は自分のクラスの問題を相談したがる。       | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ケ 養護教諭（保健室担当職員）との関係は良好である。   | [ 1 2 3 4 5 ] |
| コ 相談上の仕事を頼める教員とそうでない教員がいる。   | [ 1 2 3 4 5 ] |
| サ 学校での自分の役割ははっきりしている。        | [ 1 2 3 4 5 ] |
| シ 学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う。 | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ス 教員との相談情報の共有には不安がない。        | [ 1 2 3 4 5 ] |
| セ 学校の生徒指導はもっとゆるやかにした方がよい。    | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ソ 自分は保護者から期待されていると感じる。       | [ 1 2 3 4 5 ] |
| タ 自分は教員から期待されていると感じる。        | [ 1 2 3 4 5 ] |
| チ 自分は生徒から期待されていると感じる。        | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ツ スクールカウンセラーの仕事はやりがいがある。     | [ 1 2 3 4 5 ] |
| テ 自分のやり方は教員から「甘い」とみられている。    | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ト 現在の勤務待遇に満足している。            | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ナ 勤務回数や勤務時間がきつい。             | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ニ 勤務校を変わりたい。                 | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ヌ 学校側と保護者との関係は良好である。         | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ネ 生徒への対応には自信がある。             | [ 1 2 3 4 5 ] |
| ノ 保護者への対応には自信がある。            | [ 1 2 3 4 5 ] |

とても当てはまる = 1 だいたい当てはまる = 2 どちらともいえない = 3  
 あまり当てはまらない = 4 全く当てはまらない = 5

- ハ 教員への対応には自信がある。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ヒ 不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信がある。 [ 1 2 3 4 5 ]
- フ もっと思い通りにやらせてもらいたい。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ヘ スクールカウンセラーは学校に必要なと思う。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ホ 相談受付や予約方法はうまく機能している。 [ 1 2 3 4 5 ]
- マ 相談室の設置環境や備品等は整っている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ミ 教員の意識は集団指導に偏りがちだと思う。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ム 相談担当の教員との連携はうまくいっている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- メ 生徒は相談室を気軽に訪れている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- モ 授業中の相談 / 来室について学校側は承認している。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ヤ 生徒はいきいきと学校生活を送っている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ユ 相談室や保健室以外に生徒がリラックスできる場が学校にある。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ヨ 教員は生徒一人一人の心を大切にしている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ラ 生徒が相談に行くことを快く思わない雰囲気が教員にある。 [ 1 2 3 4 5 ]
- リ 管理職はスクールカウンセラーの役割や機能を理解している。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ル 教員はスクールカウンセラーの役割や機能を理解している。 [ 1 2 3 4 5 ]
- レ 自分は学校の中で孤立している感じがする。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ロ 教員に対する心理的サポートの必要性を感じる。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ワ 児童相談所などの外部機関との連携はうまくいっている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ヲ 職員会議や教員ミーティングに参加する機会がある。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ガ 相談情報の管理はうまくいっている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ギ 自分は学校教育については素人だと思う。 [ 1 2 3 4 5 ]
- グ 自分（SC）の役割や存在は生徒に周知されている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ゲ 自分（SC）の役割や存在は教員に周知されている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ゴ 教員と生徒間のコミュニケーションは良好である。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ザ 生徒の学校でのストレスは大きいと感じる。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ジ 教員はいきいきと仕事をしている。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ズ 教員間のコミュニケーションは良好である。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ゼ 困ったときに相談できる人が学校内にいる。 [ 1 2 3 4 5 ]
- ゾ 専門家のスーパーバイザーがほしい。 [ 1 2 3 4 5 ]



6.3 各調査項目の集計結果表（調査用紙1）

この調査にはどなたが回答されますか？

校長	教頭	教務主任	生徒指導主事	教育相談係	養護教諭	その他
0 (0.0%)	8 (7.8%)	2 (2.0%)	25 (24.5%)	46 (45.1%)	17 (16.7%)	4 (3.9%)

a SCは男性ですか、女性ですか？

男	女
25 (24.5%)	77 (75.5%)

b SCはどの年齢層ですか？

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
40 (39.2%)	16 (15.7%)	17 (16.7%)	23 (22.5%)	6 (5.9%)

c SCのSC経験年数は何年ですか？

1年以下	2～3年	4～5年	6～7年	8～9年	10年以上
19 (18.6%)	43 (42.2%)	15 (14.7%)	18 (17.6%)	1 (1.0%)	6 (5.9%)

d SCはどのような資格がありますか？（複数選択可）

臨床心理士	教員免許	特になし	その他
62 (60.8%)	30 (29.4%)	22 (21.6%)	7 (6.9%)

e SCにはSC以外の職歴はありますか？（複数選択可）

教職経験	大学勤務	病院勤務	相談機関勤務	特になし	その他
8 (7.8%)	20 (19.6%)	34 (33.3%)	52 (51.0%)	17 (16.7%)	11 (10.8%)

f あなたの学校にSCが配置されて何年になりますか？

1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上
22 (21.6%)	25 (24.5%)	17 (16.7%)	14 (13.7%)	5 (4.9%)	19 (18.6%)

g SCとの連絡・調整はどなたが担当していますか？

教頭	教務主任	生徒指導主事	教育相談係	養護教諭	その他
8 (7.8%)	1 (1.0%)	23 (22.5%)	47 (46.1%)	20 (19.6%)	3 (2.9%)

h SCを受け入れるにあたってどのようなことを行っていますか？（複数選択可）

ルールについて教職員の共通理解	SCと教職員の顔合わせの時間を確保	全校集会等で生徒に紹介	プリント等で保護者に紹介
91 (89.2%)	65 (63.7%)	76 (74.5%)	91 (89.2%)
専用の相談室を用意	職員室にSCの机を用意	相談室に直接電話を設置	その他
91 (89.2%)	50 (49.0%)	50 (49.0%)	9 (8.8%)

i SCの来校日をどのように生徒に知らせていますか？（複数選択可）

学級担任が知らせる	掲示板や便りで知らせる	特に手だては講じていない	その他
40 (39.2%)	94 (92.2%)	2 (2.0%)	4 (3.9%)

j 授業中の面談の取扱いはどうしていますか？

公認にして面談を認めている	欠課にして面談を認めている	原則として認めていない	その他
59 (57.8%)	9 (8.8%)	30 (29.4%)	4 (3.9%)

k SCの面談が終わった後の情報交換をどのように行っていますか？

SCとSC担当者	SCと関係教員	SC・SC担当者・関係教員	特に情報交換なし	その他
16 (15.7%)	16 (15.7%)	66 (64.7%)	3 (2.9%)	1 (1.0%)

l SCと教職員の連絡会をどの程度の頻度で開催していますか？

年1回	年2回	年3回	年4回以上	特になし
20 (19.6%)	20 (19.6%)	11 (10.8%)	21 (20.6%)	30 (29.4%)

m 面談で知り得た情報はだれが管理/共有していますか？

SCのみ	SC・担当者	SC・関係教員	SC・担当者・関係教員
6 (5.9%)	11 (10.8%)	13 (12.7%)	39 (38.2%)
SC・担当者・関係教員・教頭・校長		その他	
19 (18.6%)		14 (13.7%)	

n SCはどのような仕事をしていますか？（複数選択可）

生徒との面談	保護者との面談	心理アセスメント	教職員との情報交換
102 (100.0%)	96 (94.1%)	16 (15.7%)	97 (95.1%)
事例研究会等での助言	保護者対象の研修会	教職員対象の研修会	広報活動
24 (23.5%)	22 (21.6%)	59 (57.8%)	54 (52.9%)
授業等でのTT活動	専門機関との連絡・調整	その他	
3 (2.9%)	29 (28.4%)	4 (3.9%)	

o SCにどのような仕事を期待しますか？（複数選択可）

生徒との面談	保護者との面談	心理アセスメント	教職員との情報交換
94 (92.2%)	91 (89.2%)	28 (27.5%)	83 (81.4%)
事例研究会等での助言	保護者対象の研修会	教職員対象の研修会	広報活動
57 (55.9%)	45 (44.1%)	80 (78.4%)	51 (50.0%)
授業等でのTT活動	専門機関との連絡・調整	その他	
23 (22.5%)	59 (57.8%)	2 (2.0%)	

p 現在のSCの勤務時間はどのくらいですか？

1日8時間・週1回	1日6時間・月2回	1日6時間・月1回	その他
41 (40.2%)	38 (37.3%)	20 (19.6%)	3 (2.9%)

q 現在のSCの勤務時間についてどのように考えますか？

多い	ちょうどよい	少ない
0 (0.0%)	38 (37.3%)	64 (62.7%)

r SCの勤務時間を増やしたい理由は何ですか？（複数選択可）

生徒との面談	保護者との面談	心理アセスメント	教職員との情報交換
60 (93.8%)	45 (70.3%)	8 (12.5%)	48 (75.0%)
事例研究会等での助言	保護者対象の研修会	教職員対象の研修会	広報活動
17 (26.6%)	13 (20.3%)	23 (35.9%)	8 (12.5%)
授業等でのTT活動	専門機関との連絡・調整	その他	
13 (20.3%)	8 (12.5%)	0 (0.0%)	

s どのくらいのSCの勤務時間を希望しますか？

週1回	週2回	週3回	週4回以上	その他
24 (37.5%)	24 (37.5%)	4 (6.3%)	5 (7.8%)	7 (10.9%)

\* とても当てはまる = 1 だいたい当てはまる = 2 どちらとも言えない = 3  
 あまり当てはまらない = 4 全く当てはまらない = 5

項目内容	1	2	3	4	5	中央値
ア SCは教職員の中にとけこんでいる	13 (12.7%)	44 (43.1%)	30 (29.4%)	15 (14.7%)	0 (0.0%)	2
イ SCと教職員との協力関係はうまくいっている	25 (24.5%)	55 (53.9%)	17 (16.7%)	4 (3.9%)	1 (1.0%)	2
ウ SCと養護教諭との協力関係はうまくいっている	45 (44.1%)	40 (39.2%)	14 (13.7%)	2 (2.0%)	1 (1.0%)	2
エ SCに生徒のことを相談するのは不安である	2 (2.0%)	1 (1.0%)	4 (3.9%)	24 (23.5%)	71 (69.6%)	5
オ SCの考え方ややり方に戸惑うことがある	0 (0.0%)	3 (2.9%)	8 (7.8%)	41 (40.2%)	50 (49.0%)	4
カ SCの役割や機能は教職員によく周知されている	13 (12.7%)	63 (61.8%)	17 (16.7%)	9 (8.8%)	0 (0.0%)	2
キ SCの役割や機能は生徒によく周知されている	6 (5.9%)	47 (46.1%)	38 (37.3%)	11 (10.8%)	0 (0.0%)	2
ク SCの役割や機能は保護者によく周知されている	0 (0.0%)	38 (37.3%)	50 (49.0%)	13 (12.7%)	1 (1.0%)	3
ケ 教師にはカウンセリングに対する抵抗感がある	0 (0.0%)	9 (8.8%)	30 (29.4%)	46 (45.1%)	17 (16.7%)	4
コ 生徒や保護者にはカウンセリングに対する抵抗感がある	1 (1.0%)	14 (13.7%)	58 (56.9%)	25 (24.5%)	4 (3.9%)	3
サ 生徒の心理面の援助になる	45 (44.1%)	54 (52.9%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	2
シ 保護者の心理面の援助になる	37 (36.3%)	53 (52.0%)	10 (9.8%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	2
ス 教師の生徒指導の負担が軽くなる	10 (9.8%)	47 (46.1%)	31 (30.4%)	11 (10.8%)	3 (2.9%)	2
セ 予約が一杯で面談時間を確保しにくい	14 (13.7%)	20 (19.6%)	28 (27.5%)	32 (31.4%)	8 (7.8%)	3
ソ SCの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる	1 (1.0%)	0 (0.0%)	5 (4.9%)	38 (37.3%)	58 (56.9%)	5
タ 成績評価とは関係がないので生徒や保護者は気軽に相談できる	28 (27.5%)	46 (45.1%)	23 (22.5%)	5 (4.9%)	0 (0.0%)	2
チ 生徒や保護者にとって秘密が守られるという安心感がある	33 (32.4%)	53 (52.0%)	15 (14.7%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	2
ツ 生徒や保護者にとって専門機関のような抵抗が少ない	23 (22.5%)	57 (55.9%)	21 (20.6%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	2
テ SCと教師の考えが一致せず生徒によく影響が出る	0 (0.0%)	1 (1.0%)	18 (17.6%)	42 (41.2%)	41 (40.2%)	4

\* とても当てはまる = 1 だいたい当てはまる = 2 どちらとも言えない = 3  
 あまり当てはまらない = 4 全く当てはまらない = 5

項目内容	1	2	3	4	5	中央値
ト 学校にはＳＣと十分な情報交換を行う時間的余裕がない	16 (15.7%)	36 (35.3%)	23 (22.5%)	22 (21.6%)	5 (4.9%)	2
ナ 教師の生徒理解が深まる	15 (14.7%)	69 (67.6%)	16 (15.7%)	2 (2.0%)	0 (0.0%)	2
ニ 教師のメンタルケアに役立つ	10 (9.8%)	63 (61.8%)	25 (24.5%)	4 (3.9%)	0 (0.0%)	2
ヌ 教師とは異なった専門的な見方を知ることができる	37 (36.3%)	58 (56.9%)	6 (5.9%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	2
ネ ＳＣが不登校以外の暴力や非行問題に対応することは難しい	4 (3.9%)	11 (10.8%)	56 (54.9%)	30 (29.4%)	1 (1.0%)	3
ノ 専門機関と連携がしやすくなる	20 (19.6%)	48 (47.1%)	30 (29.4%)	4 (3.9%)	0 (0.0%)	2
ハ ＳＣによって救われる生徒がいる	63 (61.8%)	35 (34.3%)	3 (2.9%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	1
ヒ 専門家だという安心感がある	56 (54.9%)	41 (40.2%)	4 (3.9%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	1
フ 面談で知り得た情報の管理／共有の方法は適切である	36 (35.3%)	53 (52.0%)	12 (11.8%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)	2
ヘ 教師には生徒が面談を受けることを快く思わない雰囲気がある	1 (1.0%)	6 (5.9%)	10 (9.8%)	45 (44.1%)	40 (39.2%)	4
ホ ＳＣの来校日数が少ないので十分な情報交換ができない	26 (25.5%)	31 (30.4%)	26 (25.5%)	13 (12.7%)	6 (5.9%)	2
マ 研修の機会が増え役立つ話が聞ける	10 (9.8%)	41 (40.2%)	40 (39.2%)	6 (5.9%)	5 (4.9%)	2.5
ミ 教師のカウンセリングの資質が向上する	5 (4.9%)	43 (42.2%)	47 (46.1%)	6 (5.9%)	1 (1.0%)	3
ム 学校として職場のチームワークがよくなる	4 (3.9%)	31 (30.4%)	60 (58.8%)	7 (6.9%)	0 (0.0%)	3
メ 学校には研修会や事例検討会等を行う時間的余裕がない	19 (18.6%)	39 (38.2%)	28 (27.5%)	14 (13.7%)	2 (2.0%)	2
モ 生徒が面談を受けると担任としての力量が問われる不安がある	1 (1.0%)	5 (4.9%)	17 (16.7%)	48 (47.1%)	31 (30.4%)	4

6.4 各調査項目の集計結果表（調査用紙2）

a あなたの性別は？

男	女
13 (22.8%)	44 (77.2%)

b あなたの年齢は？

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
23 (40.4%)	9 (15.8%)	10 (17.5%)	12 (21.1%)	3 (5.3%)

c あなたの心理臨床経験（スクールカウンセラーの経験を含む）年数は？

2年以下	3～5年	6～9年	10～14年	15～19年	20年以上
11 (19.3%)	15 (26.3%)	11 (19.3%)	7 (12.3%)	5 (8.8%)	8 (14.0%)

d あなたのスクールカウンセラーの経験年数は？

1年以下	2～3年	4～5年	6～7年	8～9年	10年以上
10 (17.5%)	25 (43.9%)	10 (17.5%)	9 (15.8%)	1 (1.8%)	2 (3.5%)

e あなたが基盤とする心理臨床領域は？

学校	医療	福祉	司法	産業	その他
35 (61.4%)	12 (21.1%)	3 (5.3%)	0 (0.0%)	1 (1.8%)	6 (10.5%)

f 現在スクールカウンセラーを何校担当していますか？

1校	2校	3校	4校	5校以上
14 (24.6%)	17 (29.8%)	20 (35.1%)	4 (7.0%)	2 (3.5%)

g スクールカウンセラー以外に勤めているところがありますか？

常勤職がある	他の非常勤職がある	ない
7 (12.3%)	30 (52.6%)	20 (35.1%)

h 大学学部/大学院の授業でスクールカウンセリングについて学ぶ機会がありましたか？

十分にあった	ある程度あった	あまりなかった	全くなかった
4 (7.0%)	18 (31.6%)	13 (22.8%)	22 (38.6%)

i スクールカウンセリングに関する研修は必要ですか？

とても必要	ある程度必要	あまり必要でない	全く必要でない
27 (47.4%)	28 (49.1%)	2 (3.5%)	0 (0.0%)

j 臨床心理士（認定協会資格）の資格は？

すでに取得している	取得するつもり	所得は考えていない
33 (57.9%)	16 (28.1%)	8 (14.0%)

\* とても当てはまる = 1  だいたい当てはまる = 2  どちらとも言えない = 3  
 あまり当てはまらない = 4  全く当てはまらない = 5

項目内容	1	2	3	4	5	中央値
ア スクールカウンセラーの仕事に慣れた	1 0 (17.5%)	2 7 (47.4%)	1 3 (22.8%)	7 (12.3%)	0 ( 0.0%)	2
イ 学校での自分の居場所ははっきりしている	1 7 (29.8%)	2 8 (49.1%)	8 (14.0%)	4 ( 7.0%)	0 ( 0.0%)	2
ウ 自分は生徒に受け入れられていると思う	4 ( 7.0%)	2 9 (50.9%)	2 1 (36.8%)	3 ( 5.3%)	0 ( 0.0%)	2
エ 管理職（校長／教頭）との関係は良好である	1 2 (21.1%)	3 4 (59.6%)	1 1 (19.3%)	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	2
オ 自分と教員との関係は良好である	1 0 (17.5%)	2 4 (42.1%)	2 0 (35.1%)	3 ( 5.3%)	0 ( 0.0%)	2
カ 教員のやり方や考え方に戸惑うことがある	4 ( 7.0%)	1 8 (31.6%)	1 4 (24.6%)	1 8 (31.6%)	3 ( 5.3%)	3
キ 教員とのコミュニケーションには苦勞しない	6 (10.5%)	1 6 (28.1%)	1 6 (28.1%)	1 5 (26.3%)	4 ( 7.0%)	3
ク 教員は自分のクラスの問題を相談したがる	1 ( 1.8%)	1 2 (21.1%)	2 5 (43.9%)	1 5 (26.3%)	4 ( 7.0%)	3
ケ 養護教諭（保健室担当職員）との関係は良好である	2 4 (42.1%)	2 4 (42.1%)	7 (12.3%)	1 ( 1.8%)	1 ( 1.8%)	2
コ 相談上の仕事を頼める教員とそうでない教員がいる	1 3 (22.8%)	2 3 (40.4%)	1 2 (21.1%)	6 (10.5%)	3 ( 5.3%)	2
サ 学校での自分の役割ははっきりしている	1 3 (22.8%)	2 2 (38.6%)	1 6 (28.1%)	6 (10.5%)	0 ( 0.0%)	2
シ 学校に合わせて自分のやり方を変える必要があると思う	2 2 (38.6%)	2 3 (40.4%)	8 (14.0%)	3 ( 5.3%)	1 ( 1.8%)	2
ス 教員との相談情報の共有には不安がない	5 ( 8.8%)	2 7 (47.4%)	1 2 (21.1%)	1 3 (22.8%)	0 ( 0.0%)	2
セ 学校の生徒指導はもっとゆるやかにした方がよい	1 ( 1.8%)	7 (12.3%)	3 4 (59.6%)	1 2 (21.1%)	2 ( 3.5%)	3
ソ 自分は保護者から期待されていると感じる	3 ( 5.3%)	1 1 (19.3%)	2 8 (49.1%)	1 3 (22.8%)	1 ( 1.8%)	3
タ 自分は教員から期待されていると感じる	2 ( 3.5%)	1 4 (24.6%)	3 4 (59.6%)	5 ( 8.8%)	1 ( 1.8%)	3
チ 自分は生徒から期待されていると感じる	2 ( 3.5%)	2 0 (35.1%)	3 0 (52.6%)	4 ( 7.0%)	0 ( 0.0%)	3
ツ スクールカウンセラーの仕事はやりがいがある	1 5 (26.3%)	3 1 (54.4%)	1 0 (17.5%)	1 ( 1.8%)	0 ( 0.0%)	2
テ 自分のやり方は教員から「甘い」と見られている	0 ( 0.0%)	1 5 (26.3%)	2 6 (45.6%)	1 0 (17.5%)	5 ( 8.8%)	3

\* とても当てはまる = 1 だいたい当てはまる = 2 どちらとも言えない = 3  
 あまり当てはまらない = 4 全く当てはまらない = 5

項目内容	1	2	3	4	5	中央値
ト 現在の勤務待遇に満足している	6 (10.5%)	18 (31.6%)	17 (29.8%)	15 (26.3%)	1 (1.8%)	3
ナ 勤務回数や勤務時間がきつい	2 (3.5%)	6 (10.5%)	12 (21.1%)	27 (47.4%)	10 (17.5%)	4
ニ 勤務校を変わりたい	0 (0.0%)	3 (5.3%)	10 (17.5%)	22 (38.6%)	22 (38.6%)	4
ヌ 学校側と保護者との関係は良好である	3 (5.3%)	17 (29.8%)	31 (54.4%)	5 (8.8%)	0 (0.0%)	3
ネ 生徒への対応には自信がある	1 (1.8%)	30 (52.6%)	21 (36.8%)	5 (8.8%)	0 (0.0%)	2
ノ 保護者への対応には自信がある	1 (1.8%)	28 (49.1%)	22 (38.6%)	6 (10.5%)	0 (0.0%)	2
ハ 教員への対応には自信がある	1 (1.8%)	15 (26.3%)	25 (43.9%)	15 (26.3%)	1 (1.8%)	3
ヒ 不登校以外の暴力や非行問題に対応できる自信がある	3 (5.3%)	17 (29.8%)	18 (31.6%)	17 (29.8%)	2 (3.5%)	3
フ もっと思い通りにやらせてもらいたい	1 (1.8%)	6 (10.5%)	16 (28.1%)	28 (49.1%)	6 (10.5%)	4
ヘ スクールカウンセラーは学校に必要だと思う	25 (43.9%)	25 (43.9%)	7 (12.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2
ホ 相談受付や予約方法はうまく機能している	11 (19.3%)	26 (45.6%)	9 (15.8%)	9 (15.8%)	2 (3.5%)	2
マ 相談室の設置環境や備品等は整っている	9 (15.8%)	11 (19.3%)	15 (26.3%)	16 (28.1%)	6 (10.5%)	3
ミ 教員の意識は集団指導に偏りがちだと思う	3 (5.3%)	14 (24.6%)	18 (31.6%)	18 (31.6%)	3 (5.3%)	3
ム 相談担当の教員との連携はうまくいっている	23 (40.4%)	25 (43.9%)	4 (7.0%)	5 (8.8%)	0 (0.0%)	2
メ 生徒は相談室を気軽に訪れている	7 (12.3%)	26 (45.6%)	7 (12.3%)	14 (24.6%)	2 (3.5%)	2
モ 授業中の相談/来室について学校側は承認している	24 (42.1%)	14 (24.6%)	7 (12.3%)	7 (12.3%)	4 (7.0%)	2
ヤ 生徒はいきいきと学校生活を送っている	3 (5.3%)	23 (40.4%)	22 (38.6%)	7 (12.3%)	1 (1.8%)	3
ユ 相談室や保健室以外に生徒がリラックスできる場が学校にある	2 (3.5%)	17 (29.8%)	15 (26.3%)	20 (35.1%)	2 (3.5%)	3
ヨ 教員は生徒一人一人の心を大切にしている	5 (8.8%)	20 (35.1%)	20 (35.1%)	10 (17.5%)	1 (1.8%)	3

\* とても当てはまる = 1  だいたい当てはまる = 2  どちらとも言えない = 3  
 あまり当てはまらない = 4  全く当てはまらない = 5

項目内容	1	2	3	4	5	中央値
ラ 生徒が相談に行くことを快く思 わない雰囲気がある	0 ( 0.0%)	7 (12.3%)	15 (26.3%)	29 (50.9%)	5 ( 8.8%)	4
リ 管理職はスクールカウンセラー の役割や機能を理解している	9 (15.8%)	27 (47.4%)	16 (28.1%)	4 ( 7.0%)	0 ( 0.0%)	2
ル 教員はスクールカウンセラーの 役割や機能を理解している	2 ( 3.5%)	23 (40.4%)	24 (42.1%)	6 (10.5%)	1 ( 1.8%)	3
レ 自分は学校の中で孤立している 感じがする	2 ( 3.5%)	8 (14.0%)	13 (22.8%)	23 (40.4%)	11 (19.3%)	4
ロ 教員に対する心理的サポートの 必要性を感じる	18 (31.6%)	27 (47.4%)	7 (12.3%)	4 ( 7.0%)	0 ( 0.0%)	2
ワ 児童相談所などの外部機関との 連携はうまくいっている	1 ( 1.8%)	8 (14.0%)	32 (56.1%)	11 (19.3%)	4 ( 7.0%)	3
ヲ 職員会議や教員ミーティングに 参加する機会がある	2 ( 3.5%)	15 (26.3%)	6 (10.5%)	17 (29.8%)	16 (28.1%)	4
ガ 相談情報の管理はうまくいって いる	10 (17.5%)	30 (52.6%)	11 (19.3%)	5 ( 8.8%)	0 ( 0.0%)	2
ギ 自分は学校教育については素人 だと思う	8 (14.0%)	19 (33.3%)	13 (22.8%)	14 (24.6%)	3 ( 5.3%)	3
グ 自分（ＳＣ）の役割や存在は生 徒に周知されている	6 (10.5%)	25 (43.9%)	18 (31.6%)	7 (12.3%)	1 ( 1.8%)	2
ゲ 自分（ＳＣ）の役割や存在は教 員に周知されている	10 (17.5%)	23 (40.4%)	16 (28.1%)	7 (12.3%)	1 ( 1.8%)	2
ゴ 教員と生徒間のコミュニケーション は良好である	1 ( 1.8%)	24 (42.1%)	25 (43.9%)	5 ( 8.8%)	1 ( 1.8%)	3
ザ 生徒の学校でのストレスは大き いと感じる	12 (21.1%)	22 (38.6%)	18 (31.6%)	4 ( 7.0%)	0 ( 0.0%)	2
ジ 教員はいきいきと仕事をして いる	2 ( 3.5%)	16 (28.1%)	24 (42.1%)	13 (22.8%)	1 ( 1.8%)	3
ズ 教員間のコミュニケーションは 良好である	3 ( 5.3%)	17 (29.8%)	25 (43.9%)	10 (17.5%)	1 ( 1.8%)	3
ゼ 困ったときに相談できる人が学 校内にいる	8 (14.0%)	33 (57.9%)	7 (12.3%)	7 (12.3%)	2 ( 3.5%)	2
ゾ 専門家のスーパーバイザーがほ しい	22 (38.6%)	17 (29.8%)	13 (22.8%)	4 ( 7.0%)	1 ( 1.8%)	2